

「震災そして復興、9つの人と人との物語・西区」

明日への新聞

齊藤 葵

「ママ、これ何？」

引越しの準備をしているときにたんすの奥から見つけたファイル。色あせている割に、しっかり箱の中に入っていて大切に保管されていた。

「ああ、それ。中身、見てみ」

一ページめくってみる。古い、写真。そこに写っているのは知らない二人の笑顔だった。その右側に写っているのは小学校低学年ほどの小さな女の子だった。

「その女の子、ママ」

笑顔は今のママそのものだが、こんなに汚い服を着ているのがお母さんだとは思わなかった。

「和くん、おばあちゃんやおじいちゃんに会ったことないやろ？ ママのお母さんとお父さんに」

たしかにそうだった。パパのほうのおばあちゃんとおじいちゃんは毎年正月に会うけれど、ママのほうのおばあちゃんとおじいちゃんは写真でしか見たことがなかった。

「和くんのおばあちゃんとおじいちゃんは、地震で死んだ。阪神淡路大震災。そのファイルの写真は、その地震の後に撮ったもの」

「おばあちゃんとおじいちゃんが死んだ後やのに、なんで笑ってるん？」

「笑顔っていうものを知ったから、かな。和くん、阪神淡路大震災の被害については知ってる？」

「知ってるで。学校で授業があつたもん。たくさんの人が亡くなって、たくさんの方が壊れたんやろ？」

「うん、そう。今から話すのは、そんなとき九歳だったママの話」

そう言つてママは話を始めた。

「地震が終わつたあと、ママはひとりぼっちになった。地震が起こったとき、ママの両親はたまたま長田区におつてん。朝から雑誌の取材に行つとつた」

「それで？」

「長田区はね。被害、大きかつたねん。多くの方が死んだ。二人は、そのひとり」

「ママは、ひとりぼっちになつたん？」

「避難所の学校にはたくさんの方がおつたから本当にひとりではなかつただけど、お母さんとお父さんがいないから、ね……」

「避難所で何してたん？ ゲームとかできるん？」

「何もしない。いや、できへんのほうが正しいかな。西区は他の区に比べて確かに被害は少なかつた。でも、亡くなった人がいないわけではない。そんなとき、ママはもう両親を失つた。ママの場合、ずっとカメラを触つてたかな」

「カメラ？」

「お母さんとお父さんがくれたもの。誕生日にお母さんとお父さんは新しいものを買つたから、つて。棚に飾つてただけど、地震の揺れで落ちちやつて壊れてん。お母さんとお父さんが死んで、何をしたらいいかわからなかつた。だからずっと触つた。布団の中でも、トイレの列に並んでいるときも、食事の列に並んでるときも」

「直つたの？」

「ううん。ママが触れば触るほど部品は外れていくばかりで。それで、ねじ失くしちゃつたんだよね。布団ひっくり返して探したけど、まったく見つからなくて。そしたら隣の布団のおじさんが声をかけてくれた。季節外れの半袖半ズボン。靴下は左右違う柄。その人のこと、初めてしっかり見たんだけど、なんかすごい変な人で」
ママは少し上を向いた。

「ねじ、一緒に探してくれて。まあ、結局見つからなかつたんだけど。それで、悲しんでたら鞆のなかをひっくり返して、探してたんとおなじようなねじをくれてん。そのあとカメラ直したる、つて元の状態にしてくれた」
「それで、笑顔になつたんや」

「確かに、それで笑顔になつたけど、あの写真はもつと先のものや。その話、聞く？」

「聞く。ちょっと待つて」

なぜかはわからないけど、自然とメモを手にしていた。

寝る前、今日取ったメモを片手に、慣れない文章を書いていた。今の自分が、そのときのママのすべてを表すことができないのはわかってた。それでも、ママの経験を文字に残したくて、できるだけ丁寧な字で文章にしてみた。小さかったママの目線になつてペンを進めた。

カメラを直してくれたおじさんは次の日、荷物の整理をしてどこかへ出かけようとしていた。

「どこに行くの？」

「ボランティアだ。被害が大きかった他の区の方に」

おじさんは大きなかばんを背負った。

「私も、行く」

「なんで行きたいん？ 理由もないんやろ。暇やから行くみたいな考えで行けるとこちゃう」

「カメラ。カメラで写真をとる」

自分でも、どうしてそんなことを言ったのかわからなかった。おじさんは、私の手元にあるカメラを見た。

「新聞でも、書くんか？ それなら自己責任でついてこい。そのかわり、ここにいる人みんなが笑顔になれる

もん作るんやで」

「うん」

歩きだしたおじさんについていった。泥で汚れたトラックの上で、おじさんは静かに外を眺めていた。

「新聞の締切、来週な」

その夜、おじさんはそう言つて自分の布団へ入った。今日見た景色は西区からは想像できないものだつた。途中からは、写真をとることをためらつてしまつたくらいだつた。目を背け続けていた私に対し、おじさんは誰に対しても笑顔で答えていた。おじさんの笑顔は、たくさんの人を笑顔にしていた。たしかに私が笑顔になれたのも、おじさんのおかげだつた。私がおじさんと同じ立場の人だつたとしても、知らない小学生の女の子に声をかけ、探しものを一緒に探したりはしないだろう。写真を見返してみるけど、どの写真も暗いものばかりだつた。これで人を笑顔にすることはできるのだろうか。

「あの、すいません。新聞の取材なんですけど」

「いいよ。何でも聞いて」

避難所にいる人たちに取材をするとみんなが首を縦に振つてくれた。でも、その中に楽しそうな人はいなかった。みんな、自分のことで精一杯で、他の区がどのような状況にあるのかわからないのだろう。神戸中が同じ

だと思っているのかもしれない。ここが被害が少ないと知ったらここにいるみんなが笑顔になれる。おじさんの言っている通りの新聞がつかれるかもしれない、そう思った。

自分の鞆の中からしんの尖った鉛筆を取り出した。取材したこと、自分の目で見たこと、写真の大きさもすっかり考えた。自分の字をきれいだとは思わなかったが、きつとこれでみんなが笑顔になれる、という自信から、自然と言葉が浮かんできた。書き終わったあと、いつの間にか眠ってしまっていた。

朝になり、起きたばかりのおじさんに自信満々に昨日書いたものを差し出した。

「おじさん、写真はこれがいい」

カメラを差し出し、おじさんの顔を覗き込んだ。しかし、おじさんの顔に笑顔などなかった。

「これが、あんたの思うみんなを笑顔にできる新聞なんか」

おじさんはこれまで聞いたことのない低い声を出した。

「うん……」

おじさんの怖さでいつの間にか声は小さくなっていた。すると、急におじさんは目の前の紙を破り始めた。何も言えず、固まることしかできなかった。

「もう一回言う。期限は来週や」

それだけを言つて体育館の方へ歩いていってしまった。さつきまでの自信はいつの間になくなっていた。

考えてみても、同じようなことしか出てこなかった。自分が何もできていない間、避難所の中に笑顔が増えていった。その笑顔の先にはおじさんの姿があつた。なんだか少し悔しかつた。誰もいない体育館の裏で考えていると、少し離れたところで泣いている女の人がいた。でも、それは悲しんでいるのではなく、どこか安心しているように感じた。

「なんで泣いているんですか」

昨日の悔しさから思わず聞いてしまった。

「嬉しかつたから」

女の人は笑つた。

「いいことでもあつたんですか」

「いいこと、か。弟が生きてたから。弟は兵庫区に住んでるんだけど、地震があつてから連絡がとれなくて、それで今日弟から電話がかかつてきたの。他の区の様子がわからなかつたから、ずっと不安だつたけど。やつぱり嬉しくて」

「勝手に声をかけてすいません」

「全然大丈夫。初めの方は、やつぱり自分のことしか考えられなかつたけど、やつぱり私には周りに誰か必要な

んだな、つて。直接会えなくても、大切な人がいるつていうだけで頑張れる気がして。あなたは、ここで一人？」

「うん」

「そうなんだ。でも、ひとりぼっちではないんだよ」

「えっ？」

私には女の人の言っていることがわからなかった。

「みんながいるから。みんなで支え合つて、またこれまでみたいに笑おうよ。あなたもきつと今の私みたいに、心の底から幸せ、つて思える日が来るはずだから」

私はハッ、となった。

「ありがとうございました」

それだけを言つて自分の布団の元へ向かった。先の丸まった鉛筆も気にせず、鉛筆を進ませた。写真のひとつひとつをじっくり見た。自分の探していた写真は意外と少なかった。それでも見つけたときは嬉しかった。

「おじさん。期限、まにあつたよ」

書きあげた新聞を差し出した。今回は前とは違い、自信があつたわけではなかった。でも、この新聞を書いてるうちに自然と笑顔になつていた自分がいた。静かにおじさんの顔を覗き込んだ。はつきりとは見えなかったけど、おじさんの目に涙がうかんでいるような気がした。

「何枚印刷してほしい?」

おじさんはしゃがみこみ、私と同じ目線になつて聞いてきた。

「何枚? 百、くらいでいいの?」

「俺に聞いてどうすんだよ。新聞記者の娘なら自分で考えろ」

私はもう一度おじさんの顔を覗き込み、首を傾けた。

「なんで俺がそんなこと知つてるかつて? カメラに貼られてるシール。消えかけてるけど新聞、つて書いてるやん」

おじさんは笑つた。おじさんの笑顔を正面で見るのは初めてだつた。私もそれに答えるように笑つた。

「そのカメラ、あんたの両親のやろ。これで、あんたは両親の仕事を引き継いだんや。次の締切は来週な」

「締切?」

「これからも書くんちゃうん?」

「わかつた。書く。そのかわり……」

私は手元にあるカメラの電源を入れた。カメラをおじさんに向け、シャッターを押した。

「次の写真はこれ。見出しは、避難所のスマイルおじさんの正体」

「なんやそれ、俺、ネタにされてるやん」

おじさんの言う「みんな」は、私だけでも、ここの避難所にいる人だけでなく、神戸にいる人全員のことなの

だ。はじめに書いた新聞は、ただ何かを書けた気でいる自分の、自己満足でしかなかったのだ。他の区でとった写真の中に隠れていた小さな笑顔。それはただ自分が見つけることのできなかつた笑顔であり、生み出すことのできるものなんだ、おじさんはそれを自分で気づいてほしくて、私にチャンスを与えてくれたのだ。

「写真、いいですか？」この言葉がいつの間にか口癖になっていた。避難所でも、おじさんのボランティアについていた先でも、いつしか笑顔は増えていった。写真の片隅にあつた笑顔は、いつしか新聞の一面に入り切らないほどになっていた。関東に住んでいる親戚の元へと移動することが決まったとき、おじさんは表情一つ変えずに「行つて来い」と言った。

関東へと向かう車の中、最後にとつた、おじさんとの写真を握りしめながら一人で窓の外を眺めていた。ボランティアに向かうトラックで、外を眺めていたおじさんは、今の私と同じように一つでも多くの笑顔を探していたのだ。おじさんは最後まで自分の名前も名乗らず、さよならも言わなかつた。それはとてもおじさんらしくあつた。窓に映る私の顔は、今日も笑つていた。

僕は学校の準備をするため、勉強机に向かつた。昨日、まとめて右においたはずの書き終えた文章は、知らない間に左側に寄つていた。その上に、小さなメモが置いてあつた。

今となつては震災のときの話は昔の話のように感じます。それでも、私はその経験と、おじさんの笑顔を忘れずに、今日も生きています。

そのメモはママの字だった。いつもなら自分の文章を勝手に読まれたら怒るだろう。でも、今は自然と笑顔でいよつと思つた。僕にとつては顔も名前も知らない人たちの、笑顔を思い浮かべながら。

僕は、ペンをとり、ママのメモの内容を付け足した。インクのかすれかけた句点を書きながら、窓を見た。僕の顔は、いつもどおりの笑顔だった。

西区の被害

死者	九人
負傷者	一六四〇人
全壊	四三六棟
半壊	三二六二棟

神戸新聞社の資料(<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/sp/pl.shtml>によれば、以下同じ)

震災そして復興、9つの人と人との物語・須磨区 人と、人と 赤松理子

「麻衣ちゃん、三番テーブルにこれ持っていってー」

「松本さーん、次五番テーブルにデザートね」

「由香ちゃん、いま来た家族、ちっちゃい子と妊婦さんおるから、子供椅子とひざ掛け渡したって」

そんな声が飛び交うカフェの厨房。個人営業の小さな店とはいえど、昼の時間帯はやはりお客さんでいっぱい。優しい店員さんや地域の野菜を使ったりしているのがいいな、と思つてバイトの面接を受けた。働いてみてもそのイメージは崩れることはなく、むしろもつとこのカフェが好きになった。店長はバイトの私も気にかけてくれる。一緒に働く仲間とも仲がよく、お客さんも優しい。これから今通っている高校を卒業したら、大学に入るかこゝで働くか迷っている。

「荻原さん、由香、昼休憩入つていいよ。冷蔵庫にサンドイッチ入ってるから食べてね」

お客さんも少なくなってきた頃、店長から声がかかった。このお店のサンドイッチはすごく美味しい。まかないでそれをいただくのは麻衣のちよつとした楽しみになっていた。

「はい。ありがとうございます」

「そうだ、荻原さん、明日から休みだからね。お正月も近いし、お店も定休日やからゆつくりしてね」

「母さん、私はー？」

「由香、あんたはうちの手伝いがあるでしょ」

そういつて店長はまた厨房に引つ込んでしまった。

スタッフルームで由香ちゃんと美味しいサンドイッチを食べながら、年の近いバイト仲間と話をしていた。一緒に置いてくれていたポテトもみんなと一緒に食べた。

「由香ちゃん、大学どう？」

「楽しいよ。そういえばサークルで飲み会があるんだ。明日」

「そうなんや。あれ？ でも由香ちゃん明日はたこ焼き屋さんのバイト、入ってるって言ってなかった？ あ

そこ、忙しいのに、ようお休みとれたね」

「そうそう、その日はなんか休みになったの」

もうちよつと話していたかったが、由香ちゃんは大学で勉強会があるらしく、先にあがつてしまった。しかし他の仲間との話もそのうちだんだん話が盛り上がってきて、ちよこちよこ愚痴が飛び交うようになっていった。

「うちのクラスの藤田さん、提出期限守らないんよ。おかげで係のうちのちが怒られるんよなー」

「わかるー。だいたいそういう人つてクラスに一人はおるよな。麻衣ちゃんは？」

「うちは最近おんなじ高校の子と喧嘩してんなー。どうでもいいことやつてんけど、ちよつとむきになつて謝らんかったら、いろいろ前のこととか、引つ張り出されて」

「仲直りは？」

「また今度でええかな。あーあ、世界に一人つきりやつたら楽なんやろなー」

そのときだった。ガチャン、と大きな音が聞こえた。音がした方を見ると、悲しい顔をした店長が立っていた。大きな音の正体はコップが割れる音のようだった。右手にプリンのおぼんを持っているところからして、お客さんにデザートをだす途中だったのだろう。いつもは優しく明るい店長からは考えられない声で続けた。

「仲直りは、早くしたほうがいいよ？　一人は寂しいから、そんなこと言つたらだめ。みんながおるから、楽しいんだよ」

「えっ」

「じゃないと、後悔するからね？　仲直り、してな」

いつになく悲しそうな目をする店長の珍しい様子にみんなびくびくしていた。私は「だって……」と反論しようとしたが、店長はすぐに破片を片付けるために、ほうきとちりとりを取りに行つた。周りを見渡すと、みんな

なもあつけにとられた顔をしている。バイトを終える直前、店長に話しかけようとしたがタイミグが合わず、店長はお客さんに呼ばれて行つてしまつた。

バイトの帰り道、方向が同じ仲間と電車の中で話した。

「なんか今日、店長のテンション低かつたな」

「たしかに。昼休憩くらいからやない？」

そんな話をしていたら、降りる駅についたので挨拶をして家に帰つた。

「ただいま」

玄関のドアを開けると、奥からお母さんが言つた。

「おかえり。ご飯食べたらずい急いでお泊りの準備して。二泊分」

「え、なにそれ」

「ゆうたやん。ばあちゃんどこ泊まりに行くよつて」

「ばあちゃんつて、須磨のばあちゃん？」

「そうそう。はよせな置いてくで」

須磨のばあちゃん、と呼んでいるのはお母さん方のおばあちゃん、神戸にいる。私が生まれる前におじいちゃんが亡くなつたので今は一人暮らしだ。私たちがいるところから車でも一時間はかかるのでめつたに会いけないが、会つたときはいつも優しくしてくれる大好きなおばあちゃんだ。ゆつくりおやつを食べてからにしよ

うと思つたが、お母さんは容赦ないので、冗談抜きで置いていかれることを思い出した。そうなりたくなくて階段を駆け上り、準備をすることにした。

「しゅっぱーっ」

そういつてお父さんが車を出した。現在午後五時。今から行くとちよつと晩御飯ぐらいだ。電話でおばあちゃんにそのことを伝えると

「そうなんかい。じゃあ今日は麻衣の好きなシチューにしようか。こちに來るときについてに人參買つといつて美月に言うといつてな」

「お母さん、人參買つといつておばあちゃんが」

「はいはい」

大好きなおばあちゃんと、大好きなシチューを食べる。そんなご褒美はこれ以上ないだろう。にこにこご機嫌で車に乗っていた。

それからおばあちゃんちに着いて、おいしいご飯を食べて、温かいお風呂に入らせてもらつて、最近あつた面白くことをおばあちゃんに報告して、ふかふかの布団に入つた。

「はあー。楽しかった」

こんな日が三日だけでなく、毎日続けばいいのに。そう思いながら眠りについた。

ふと目が覚めた。カーンという鈴の音が聞こえた気がしたのだ。枕元にある目覚まし時計を見ると、「五：

四六」の文字が表示されている。おばあちゃんだろうか。きつとおじいちゃんの仏壇に手を合わせているのだろう。

「会つてみたかつたな」

そうつぶやきながら仏壇のある部屋に向かつて歩く。そこにはおばあちゃんだけではなく、お母さんもいた。「どうしたん？ おばあちゃんだけやなくて、お母さんまで。いつもお昼とかにしているのに、今日は朝早いんやね」

そういうと、お母さんがゆつくりこつちを向いた。

「ああ、麻衣、起きとつたん。知らんかつたつけ、今日がおじいちゃんの命日つて」

「そうなん？ でもなんでこんなに朝早くから？」

そういつた私におばあちゃんが言った。

「阪神淡路大震災つて、しつとるかい？」

「うん。知つとる」

この前学校で先生がなにか言っていたな、と思いつつ、おばあちゃんの話聞いた。

「その地震が起つたんがちょうどこのくらい時間だな、そんなときは三人で避難所に向かつとつたんや。麻衣のおじいちゃんもな。瓦礫に挟まれた人を助けてん。挟まってもた人は助かつてんけどな、おじいちゃん、助けたあと『向こうでも声がする。後で行くから美月連れて行つ』といて『ゆつて帰つてこんかつてん』」

「えっ」

おじいちゃんが亡くなった理由を聞いて、私は驚いた。私は勝手に病気で亡くなったと思っていたのだ。おばあちゃんが続けた。

「でも、まだ生きてるはずやって、救助隊の人とかと一緒に探したんやけどな。美月もそのときあんだと同じ高校生やったから、学校再開してからは一人で探したりしてんけど」

「見つからなかっただけやったら、もしかしたらまだ生きてるかもよ」

私は焦った。会ったこともないけど、まだ生きてると思っていたかった。だけどそんな期待は二人の暗い顔で破られた。

「見つかつてん。見つかつてんけど……」

そういつておばあちゃんは目を伏せた。悲しそうなおばあちゃんの顔を見ると、そんな顔をさせるおじいちゃんにだんだん腹が立つてきた。

「おじいちゃん、他人なんか助けなくてささと逃げたらよかったのに」

「麻衣。そんなことない」

静かな声で言われた。お母さんは厳しい目をしている。でも、そのとき逃げていたらおじいちゃんはこの世にいない。お母さんだつて死んでほしくなかったはずだ。お母さんの方が間違っているだろう。

「でも……」

「あのな麻衣、おばあちゃんも最初はそう思つとつた。そんな知らん人なのに、なんでわたしらを置いていったんやつてな。でも、避難所におつてわかつた。人は助け合わんと生きていかれへんねん」

そう言つておばあちゃんは一つのアルバムを取り出した。

「見てみ、これが地震の二日後。これが七日後、最後が三ヶ月後」

そういつて見せてくれた写真には水族館が写つていた。一枚目に写る水族館は水槽が割れ、中が水浸しになり、標本が散らばつていたり、割れていない水槽は藻がいつぱい生えて、中が見えない状態だ。写っている飼育員さんも忙しそうだが、どこか沈んだ顔をしている。

「二枚目を見てごらん」

二枚目には、たくさんの人が写っている。さつきとは違う場所だ。みんなでご飯を食べているみたいだ。毛布が敷き詰められていて、今私たちが生活している家とはほど遠いけれど、みんなほつとした顔をしている。たくさんの人にご飯を配っている人も、もらっている人も、あまり眠れていないのか隈ができています。それでも顔には希望が溢れていた。

「最後に、これ。これは三ヶ月後」

そう言いながら三枚目の写真を見せてくれた。

「わあつ」

そこに写つていたのはたくさんのお客さんが楽しそうに笑っている様子だつた。きれいな建物の前で、子供も、

大人も、ご老人も、みんな嬉しそうだ。

「これ、全部違つとこなん？」

「ぜーんぶ同じとこやで。だいぶ綺麗になつとるやろ。麻衣もよう知つとるとこやで」

そう言われて、もう一度三枚目の写真を見る。遠くに写つてゐると画質が荒いのとわかりにくいが、上の方の看板に書いてある文字を読むと、そこには『須磨海浜水族園』の文字があつた。

「こゝ、スマスイやつたんか」

「そうそう。じゃあ麻衣、なんでこんなにボロボロになつてもたスマスイが、こんなにきれいになつたと思う？」

「お金があつたから」

私は即答した。そんな私を見て、お母さんは言つた。

「確かにお金がないと建物は直されへん。一人で集められる額のお金やないから周りの人の手助けがいる。でも周りの人はそんな場合やない。人の心はお金じゃ直せへんやろ？」

「まあ、確かに」

「でもみんなに手助けしてもらつて、今みたいなスマスイに戻つたのはなんでやと思う？ それほな、地震の直後にスマスイが開いてる館を学校や避難所にしたたり、ご飯を配つたりしてみんなを助けたからや。ほら、『情けは人の為ならず』つてゆうやろ？ 助けたら、いつか自分に返つてくるねん。そうやつたら、知つとる人しか助けへんと思うやろ？ それが、違ふねん。人間、ご飯食べな生きていかれへんやろ。今日のご飯だつて、農家さん

がおつて、運ぶ人がおつて、売る人がおつて、買う人がおつて、加工する人がおる。それだけで麻衣は最低五人に助けられとる。でもその五人が働くためにもそれぞれ五人ずついる。それでみんなどつかで人を助けてる」

その言葉を聞いて、人を助けることは大事だということにはわかった。しかし麻衣はまだ納得できなかった。

「じゃあ、おじいちゃんが人を助けたんはどないなつたん？」

そう言うとおばあちゃんはこうと笑つていった。

「それは、お父さんから聞いてみな」

なぜお父さん？ と首を傾げていると、お父さんが目を覚ました。

「おはよう……て麻衣、なんでこんなに早起きしたんだ？」

「お父さん、おじいちゃんが震災のときに人を助けたつて知つとる？」

「え？　なんで急にそんなこと言うんや？　あつ、おばあちゃんやな。あゝあ、その話は麻衣が二十歳になつて、大人のスタートを切つたときに、ちゃんと向かい合つて話をしようと思つてたんやけどなあ……。まあ、いいかあ」

そう言つて、お父さんは居住まいを正した。そして、どこか遠くを見るような表情で話し出した。

「知つてるも何も、助けてもらつたんは父さんや。あんどきおじいちゃんが助けてくれたから、麻衣がおんねんで。あんどき父さん、高校生でな。犬が挟まつどんのを助けとつたらダンスが倒れてもて。もうあかんと思つたからお母さんらが通るかかつたんや。ええから先行つてつて言うたけど、周りの人も呼んで助けてくれてな」

「それで？」

「そのあと麻衣のおじいちゃん、亡くなつてもたつて知つてな、最初は自分のせいやつて落ち込んだんや。でも、周りの人見とつてなんかできることをやろうと思つてな。小さい子らもショックが大きいやろうから、ちよつとも紛らわせるために小つちやい学校を始めたんや」

「へえ」

「そのうち避難所の学校の先生らも一緒になつて、それまで暗かつた子らも楽しそうにしてな。自分の気持ちも軽なつてきたんや。ああ、みんながおるつていいなつて」

気が付けば、お父さんの目は、しっかりと私を捉えていた。

確かに。お母さんと喧嘩しても、仲直りしてくれる。そのあとは、喧嘩する前より楽しくおしゃべりできる。学校で、しんどそうだった係の子の仕事を助けたら、次の当番のとき、「この前はありがと」といつて、代わつてくれた。どれもこれも、みんながいけないといけない。世界で私一人だったらこんなことはなかつただろう。そうか、という私に三人は笑顔で答えてくれた。笑っている三人を見て、ああ、笑顔つて人の心を明るくできるんだな、とも思つた。

それからおばあちゃんちでお泊りできる日々も終わつたが、まだバイトがあつた。あんなことがあつたから、会うのも気まずいな。そう思つていたときだった。おばあちゃんたちとの会話を思い出した。

「店長」

「ああ、麻衣ちゃん。おはよう」

「あの、この前のことなんですけど。あのあと、おばあちゃんちにいったんです」

「うん」

「それで、次の日おばあちゃんと、お母さんと、お父さんと話をしたんです。それで人は助け合って生きていて、みんながいるから喧嘩も、仲直りもできるって」

「うん」

「だから、みんながいてよかった。あのとき一人にならなくてよかったって思えるようにします」

「よかった」

そう言つて、店長は笑つた。昔の話をしてくれた。震災のちよつと前、とても仲のよかった友達と喧嘩したことで、自分が悪いのに、謝らなかつたこと。地震が起つて、もう会えなくなつたこと。謝りたくても、どれだけ呼んでももう会えなかつたこと。そのことで落ち込む自分を周りの人が助けてくれたこと。

「周りの人も大変なのに、助けてくれて。人は一人じゃだめなの。みんながいるから生きていける。それでね、あのときの荻原さんが昔の私と重なつて。後悔してほしくないから、ちよつときつく言っちゃつて。ごめんね。でも、これだけは覚えておいてほしいの。震災で私は、深く傷ついた。でも、同時に仲間の大切さを知つたの」

そのときの店長の顔と言葉を、私は一生忘れないだろう。

それから私はお店の中もよく見てみた。あの人は、店長にいつも野菜を届けてくれる。それで美味しいご飯

を作る。できたご飯をみんなが食べに来る。美味しいご飯は人を幸せにして、みんな笑顔になる。なんかいいな、そう思った。すると、無性に友達が恋しくなつた。

「今日早く上がつてもいいですか」

そう尋ねると、笑顔で許してくれた。

「いいよ。仲直りしておいで」

いつもお客さんをよく見ている店長の目は、私のこともよく見えるみたいだつた。

家に帰って、スマホの電源を入れる。本当は直接会つて話したいけれど、喧嘩する前に聞いた話では、友達は冬休み旅行に行くらしい。だから電話にしよう。友達のアイコンをタップして、電話をする前に会話の履歴をしてみる。遊ぶ約束もしたし、友達の恋バナも聞いた。「今日の晩ごはんはオムライスだつた」などといった何気ない会話も楽しかった。落ち込んだときは励ましてくれた。そこまで深く見たことがなかったから、今日初めて知つたのかもしれない、ああ、私、こんなに



友達と過ごしてたんだ。

大きく息を吸い、電話をかける。ブルル、ブルル、となる呼び出し音。出てくれるかな、まだ怒ってるかな。なかなか出ないから、こんな思いが頭によぎった。やっぱりだめか、そう思ったときだった。

「麻衣っ！ ごめんね！ 私、言い過ぎた」

電話口から友達の大きな声が聞こえた。

須磨区の被害

死者	三九九人
負傷者	六三七人
全壊	七六九六棟
半壊	五六〇八棟

震災そして復興、9つの人と人との物語・垂水区
しあわせを運べるように 十倉明日香

「よし、じゃあ今日はこれ練習するで」

そう言つて先生が示した黒板には、大きな文字。

「しあわせ運べるように」

クラスのみんなの歌声が、どこか遠くに聞こえた。

暖房のききにくい音楽室には、冬特有のキンと張り詰めた空気が満ちている。

手元に目を落とした。一年生のとき配られた歌詞カードには、ひらがながひしめいている。低学年にもわかりやすいように、というのはわかるけれど、六年生の今となつては逆に読みにくい代物だ。

適当に口を動かして、CDの伴奏に合わせる。三十人のクラスにしては声が小さいのは、私と同じく適当に歌っている人が多いからだろう。

二番にさしかかったあたりから変な顔をしていた先生は、二番のまんなかでCDを止めた。歌うのをやめた、もしくは口を動かすのをやめた私たちを見回して、女性の先生は笑った。

「みんな、もう少し声張るか。キレイに歌えようからはーい、と。」

みんなの返事は明るかった。

音楽の先生は優しいと評判で、生徒からも慕われている……けれど。

クラスを見回すと、私の他にもふたりほど、浮かない顔の子がいる。

顔見知り、だった。

「よし、じゃあもつかいいくで」

先生がCDデッキをいじりはじめた。まもなく、前奏が流れ出す。

「せーのっ」と手を振った先生は、確かに一度、私の方を睨んでいた。

「失礼します」と声をかけて、早朝の音楽室に入る。

視線が突き刺さるのを感じた。

練習の途中だつたらしく、流れたままの伴奏の中、みんなが私を睨んでいた。

嫌われてるなあ、と、どこか他人事のように感じる。ここまで弾かれたのはいつからだつただろうか。

あの音楽の先生が、ぶつりと伴奏を止めた。ヒール型の上履きを鳴らして、私に向かって歩いてくる。

「どうして遅れたん」

声が震えている。

私は朝練にもこなかったから、相当怒っているのだろう。

「遅れてないです」

覚悟はしていた。

このところまったく練習に参加していないから、先生が怒るのは予測していた、はずなのに。

顔が上げられない。

「なにが遅れてませんや。朝練にもこーへんし、放練にも遅れてくるし、やる気がないんか。なんや、昨日のあ
れは。震災の歌やで。真面目に歌おうって気にならんのか」

言い返せない。

反論も考えてきたのに、言葉が出ない。

濃い色の床に視線を落とした。見慣れたかたちのしみが、先生のヒールに踏み潰されている。

「なんか言いなさい」

言えない。

言い返せない。

謝ることもできない。

先生が怒っている。なにも言わなければ、長引く。

それはわかっている。

わかっているのに、なにも言えない。

先生が、ため息をついた。乱暴に私の手首を掴んで、音楽室の外へ出す。

「やる気がないんやったら、やめてしまえ。嫌やったら練習来い。ええな」

私の目の前で、音楽室の扉が閉まった。

いつもは開けてあるその扉は、閉められたことで飾り付けが見やすくなっていた。

色紙で作られた花や音符。華やかなそれらはみな、生徒たちが持ち寄ったものだ。

うつすらと滲む視界の中に一つだけ、はつきりと見えるものがある。

「音楽室」「welcome」などと書かれた札の隙間に、大きく飾られたポスター。

「合唱クラブに入りませんか」

鮮やかな赤色の文字。四隅には音符のマークが切り抜かれている。

中央には、楽しそうに歌う子どもたちのイラストが貼り付けられていた。

かつての自分が憧れたポスター。

入ってみたなら、なんてことはなかった。

ただ、つらいだけだった。

私は歌うのが好きだった。

下手ではないと思っていたし、周りも上手だと褒めてくれた。学校外では合唱団にも所属していた。ただ、歌うのが楽しかった。

うまく歌えれば、よりたくさんの人が褒めてくれる。

合唱団にも私と同じような人がたくさんいて、みんなで歌を楽しめることが心地よかった。

それだけの私が、歌を好きだと言っなんて。思えば、おこがましかったのかもしれない。

小学校の合唱クラブに入った私は、戸惑った。

あまりにも熱量が違った。

あの優しい先生も、本気だった。

四年生からしか入れないからか、きつい言葉で怒鳴るのも当たり前だった。

みんな必死だった。

先生に怒られないように、歌詞も譜面も完璧に頭に叩き込まなければいけない。お互いに追い詰め合うような形で頑張っていた。

でも、結果は出せずにいた。

先生は、焦っていた。

同じ学年の子も、すぐに一緒になつて練習しはじめた。

私だけどうにも鈍くて、譜面台の準備も掃除も自主練も、いつもワンテンポ遅れていた。

それで叱られることも多くて、その分練習が遅れて、また叱られて、叱られない日がなくなつたな、と思つたあたりで、朝、起きられなくなつた。

いくら早く寝ても、朝は必ず遅刻する。寝すぎて頭が痛いくらいなのに、どうしても起きられなかつた。

朝練どころか学校の授業にすら遅刻するような生活が、今まで続いている。

最近、私の毎日は、怒鳴り声であふれている。

音楽の先生が、担任の先生が、クラブのメンバーが、私の不真面目を咎める声で。

「ねえ！」

階段を降りていたとき、背後から声がかかった。

クラブのメンバーのひとりが、息を切らせて私の近くまでやつてくる。

「ねえ、ちよつと、だいじょうぶなん？」

心から心配しているらしい声に曖昧に返事をして、視線を逸らした。

彼女は、クラブのメンバー——であり、団長。

私たち六年生の中でも格別、譜面を覚えるのが早い子。

「最近、練習来てないよな。体調悪い？　また朝練はようになったもんな。無理せんでええよ。先生はああ言っとうけど」

まくしたてるように言っつて私をうかがう様子からは、彼女が本当に私を気遣っていることが感じられる。けど、だからこそ。

（ソロが万年アルトに、何の用やねん）

暗い気持ちを抑えきれない自分が、嫌いだ。

「あたし、あんたの声好きやで。すごい澄んどつて、高い音もばあんつと出て、キレイやんか。あたしなんかよりずっと上手や。たぶんクラブで一番やわ」

「うん、ありがとう」

（ほんまは、努力せんと逃げたまんまやて、私のこと、見下しとうくせに）

「ほんまはソロかつて、あんたがやるべきやのに。あんた、ソロ試験のこと知らんかったやろ？　あんたがおらん間に決めてもて、ごめんな」

「いいよ、行かんかった私が悪いんやし」

（ライバルが一人減つて、嬉しかったんやろ。よかつたな）

「あ、これ、次の譜面。ごめん、またアルトやねんけど……」

「ありがとう。別にええよ、アルト好きやし」

（勝手に決めてから「ごめん」とか、バカらしいわ）

私は私が嫌いだ。

いろいろ考えていたのに、先生に何一つ言い返せなかった自分が嫌いだ。

誰かと目線をあわせることのできない自分が嫌いだ。

練習に行かない自分が嫌いだ。

思いとは別の言葉を口にする自分が嫌いだ。

アルトを愛せなくなつた自分が嫌いだ。

すべてから逃げてゐる自分が嫌いだ。

だから、私は私が嫌いだ。

渡された譜面は「しあわせ運べるように」だつた。

団長と別れて、通学路を逆向きにたどる。

冬の乾いた空気が、鼻の頭に刺さつた。白い息で視界が霞んで、ふと、今地震が来て火事が起きたら「いつぱ

「つ」やな、と思う。

不謹慎だ。慌ててその考えを振り払ったら、くしゃみが出た。

早く帰りたいくて足を速めたら、急にランドセルが重たく感じた。息を一旦整えて、坂を駆け上る。

ここまできたらもう少しだ。

私の住むマンションは、形が船に似ている。日照権だかなんだかで、潰されたような歪な形。

近くの住人は随分建設に反発したらしく、マンションができてからもあまり評判はよくない。できたばかり、引越したばかりの頃は、悪口もたくさん耳にした。

それでも私はここが好きだ。

連帯感があるわけじゃない。エントランスで他の住人とすれ違ったら挨拶、せいぜいその程度のつながり。

だから、居心地がいい。

エントランスに飛び込んだら、もう「逃げ切れた」ような。

小学校から逃げ続ける私にとって、家はただ一つの心の拠り所だった。

ただ、あとから耐震工事を施した小学校と違って、ここでは、Y字が見えない。

「ただいま！」

叫ぶように言つて、靴を脱ぎ捨てる。ランドセルを放つたら、あとは明日の朝まで自由だ。

「おかえり」

母が優しく微笑んで、私の持つ譜面に目をとめた。

珍しく、考え込むような顔をして、「それ、なに？」と私にたずねてくる。

「これ？『しあわせ運べるように』。震災の歌や。歌ってあげよか？」

「うん、歌って」と笑った母のために、私は息を吸う。

部屋に、私の歌声が溢れた。

響きに深みをもたせるコツは、腹筋を使うこと。おへその下あたりに力を入れて、上から引つ張られているような姿勢で、息は腹式呼吸を使ってゆったりと吸う。

足は少し開いて、ブレスのタイミングで膝の力を抜く。膝のばねを使って息継ぎをすると、息が切れにくい。全部、合唱クラブで教わったことだ。

「しあわせ運べるように」は、一年生のときから歌っている。歌詞も頭に入っていた。

この曲は、旋律の感じがいい。

歌詞の前向きさも含めて、気に入っている曲だ。

だから、ただ楽しんで歌っていた。

手も使って、のびやかに。

笑顔も、抑えきれなかった。

それなのに。

なぜか、母は泣いた。

とても静かに、泣いた。

びつくりした。あわてて歌うのをやめて、母に駆け寄る。

「どうしたん、なんで泣いとるん」

母は首を振って、なんでもないと口にした。

でもその後、思い直したように言葉を継いだ。

「思い出してしもうて。震災のこと」

あ、と声が出た。

それは、その苦しみは、私たち子どもにはうかがい知ることのできないものだから。

母は、いつそう懐かしむように続けた。

「揺れたときは、死んだと思うた。すごい音がして、布団を引っ張るのも難しくて、世界が終わったんかと思
つたわ」

「……そう」

「年取ると涙もろくてあかな。あのときはいつも泣いとつた。知り合いにも死んだ人がおつてなあ」

「そう、なんや」

母はしみじみと語る。

こんな風にならりとした涙を流せるまで、どれほどの時間が必要だったのだろうか。

「あ、ごめんな、こんな暗い話。もつと明るい、未来につながる話にすればよかつたな、おんなじ震災のこと話すんでも」

「ううん、暗い話やないで。大事やん」

勢い込んで言うと、母が黙り込んだ。目を見開いて、驚いたように私を見ている。

「大事なことやん。命の話やん。命は大事やろ」

命は、大事だ。

それくらい、震災を経験していない子どもでもわかる。

「その『暗い話』で命が救われるかもしれへんやろ」

命を失うのは、怖い。

天国に行くのか。地獄に行くのか。

神様はいるのか。仏様はいるのか。

何度も考えたことがある。

死んだあと、私はどうなるのか。

ただ暗転してそれきりならば、これ以上に怖いことはあるだろうか。

人は、わからないものを恐れる。だから人は死ぬのを恐れる。

そう聞いて、理屈はわかつて、怖い。

人は、生き物は、死を恐れる。それはどうしようもないことだから。

だからせめて死なないように、命を守ることができるよう、あのY字がある。

「阪神淡路大震災を忘れへんのは、大事なことや。でも私たち若者は震災を経験してないから、大人から伝えてもらへんとあかんねん。それで、大人から伝えられたことを、私たち若者が伝えていかんとあかんねん。震災を忘れずに、命を守るために」

言いながら、なんて難しいことなんだろうと思った。

なんて私らしい、綺麗ななんだろうと思った。

そして、なんて優しく、素敵なことなんだろうと思った。

母が、笑った。

「いいこと言うやんか。いつまでも子どもやと思つとつたけど、六年生にもなつたらもうおねえさんやな。……その曲、なんやつけ」

『しあわせ運べるように』

「そうか。いい曲やね」

その後母は笑みを深くして、言った。

「やっぱりお母さんは、あんたの楽しそうな歌声が好きやわ。上手やったで」

一瞬、息がつまった。

たぶん、私が一番ほしかつた言葉。

私はただ、褒めてほしかつた。きつとそれだけだつた。

だから。

救われた、気がした。

そして、この曲がもつと好きになつた気がした。

「大丈夫？　緊張しとう？」

団長が心配そうに私を見た。

何回目かわからないその問いに苦笑して、「大丈夫やで」と返す。

「ほんまに？　もつかい後ろ向いて、衣装の襟、確認するから」

「さつきもやったやん」

「ええからええから。こういう心配はしといて損はないんやで？」

かがいしく襟の位置を調整する彼女の腕には、団長の身分を示す金色の腕章がついている。

しよせん小学校のクラブだから、ちやちなものだ。けれど、その金色は、未だなお心配そうに眉を下げる彼女にとても似合っていた。

「ほら、終わつたで。譜面の最終チェック、済んだ？」

「うん。そろそろやね」

「そうやで、あんたの大舞台や。頑張りよ」

ソロ。

団長は、私のことをそう呼ぶ。

昇降口に目をやる。全校生徒が半旗の下に集まった運動場は、薄暗い校舎とは対照的に光に満ち溢れていた。

今日の私の、私たちの、大舞台。

私が初めてソロをやる、舞台。

「あ、団長。あの子が呼んでるみたいやで」

まだ私の身だしなみを気にしている団長の肩を叩き、おずおずとこちらをうかがっている後輩を示す。団長は慌てて、「ごめん、ちよつと待つといて。衣装汚さんとしてよー」とだけ言い残して走っていった。

(世話しない子やなあ)

少し前の自分が嘘のように、私は彼女の背中に悪意を抱かなくなっていた。

私が彼女を「団長」と呼び始めたことに、彼女は気付いているだろうか。

気付いていなかったら、それはそれでいい。それは彼女がただ善良だという証明だから。

少し声を出しておこう、と向きを変える。人のいない場所を探していたら、呼び止められた。

「ソロパートの確認、終わった？」

「あ、はい、先生」

軽く答えると、ため息をつかれた。

『あ』なんて、すっかり立ち直つとるね。こっちはこれでも、どう声かけようか迷つとつたのに」

苦笑いで私を見た先生は、「よし」と短く言つて、ぱん、と私の背中を叩いた。

「いつてらつしやい、ソロ。間違えんとなつてよ」

先生はそのまま、準備に向かつてしまった。

立ち尽くしている私に、団長が声をかける。

「ソロー！ もうすぐやでー！ ほら！」

彼女は私の肩に、ふわりと何かをかけた。

「……ケープ？」

「ソロだけの特別な衣装やで！ 先生が予算はたいて買ってくれたんや！」

緑色で光沢があつて、いつそパーティーグッズのよ
うな安物だった、けれど。

「……ありがとう」

この場で誰よりも、きつと自分に似合う装いだ
と思つた。

一月十七日。1117。半旗の下で私たちが歌つ
たのは、「しあわせ運べるように」だった。



垂水区の被害

死者	二五人
負傷者	一〇二〇人
全壊	一一七六棟
半壊	八八九〇棟

震災そして復興、9つの人と人との物語・兵庫区

おじいちゃんのカメラ

薬内 優

今日も、私は何気ない毎日を送っている。朝七時に起き、カーテンを開けると、携帯で大好きなポップミュージシャンの音楽をかける。大声で歌いながら着替えをするとなぜかすっきりと目が覚めるのだ。一階からは洗濯機の回っている音と、たてたコーヒーの香りが漂ってくる。私は少し貧血気味なのでゆつくり階段を降りる。身支度を整えリビングへ向かうと、家族と朝の挨拶をかわす。母手作りのりんごジャムをトーストに塗ってコーヒーを飲みながら一緒に食べるのが最近のマイブームだ。九時からの講義に間に合うように大学へ向かい、それを終えると夕方六時から九時までスーパでバイトをする。これといって不満はないが変化のない毎日に、私は少し物足りなさを感じていた。

ピコンピコン

「今日午前七時半過ぎに熊本で震度三の地震が発生しました」

「最近地震が多いわね。こも大丈夫かしら」

母は不安げな声で話しながらテレビを凝視している。そんな母に、

「地震なんてここには関係ないよ。つていうか地震が来て大学とバイトがお休みになればいいのに」

「そんなこと言うんじや……」

「いつてきまゝす」

「ちよつとお母さんの話を聞きなさい！」

そう言つて声を荒げる母を家に残し外に出た。今日は休日。近くの団地に住んでいる祖母の家に行き大掃除をする予定だ。ご近所さんに挨拶をしながらゆつくり歩きなれた道を進む。参道の木々は葉を落とし、なんだか殺風景だったのが、「ちつちやい頃はよくおじいちゃんと手をつなぎながら歩いたなあ。おじいちゃんは空が好きだったな」と思い出に浸りながら歩いていると全然寂しくなかった。

「あら、いらつしやい」

インターフォンを押すと、玄関の扉からひよつこりと祖母が顔を出した。

「お母さんはどうしたの？」

「ああ、お母さんなら後で来るよ」

他愛もない話をしながら祖母の家に上がる。おばあちゃん家特有の香りが鼻をかすめる。この匂いをかぐ

たびに四年前に死んだ祖父のことを思い出してしまう。私はすぐさま仏壇に向かい、祖父にあいさつをする。「おじいちゃん、今日はおじいちゃんとの思い出の道を歩いてきたよ。空は青く透き通っていて、寒かつたけどおじいちゃんの大好きなほうき雲をみつけたよ」

手を合わせながら、仏壇に飾っている祖父の写真に「ツコリと笑いかけた。

「じゃあ、おじいちゃんの部屋をお願いね」

と背後から祖母の声がした。

祖母や母は祖父が死んでから祖父の部屋に入らなくなつた。祖父の死を必死に忘れようとしていた。私もそうだ。しかし、いつまで経つても祖父の死を断ち切れないでいてはだめだ。私はそう自分に言い聞かせて部屋に入った。四年ぶりに入つたおじいちゃんの部屋はホコリだらけだつた。

部屋が半分ほど片付いたとき、タンスの奥から古びた銀色のカメラを見つけた。カメラの右端には、祖父の名前が彫つてある。カメラを眺めていると、レンズの奥が私に「見て」と誘うように光つた。私は、急に祖父が撮つた写真を見たいという衝動に駆られた。私は、さつさと掃除を終わらせ、カメラを持って家に帰つた。おじいちゃんのカメラを勝手に見てもいいのか？　と思つたが、おじいちゃんは死んでしまつているのだから考えても仕方がない。それよりも写真を見たくて私はウズウズしていた。家に着くやいなやコンセントを繋ぎカメラの電源を入れた。

現在九時五〇分だ。いつになったらカメラの電源はつくのだろうか？　そもそもカメラは壊れていないのだ

ろうか？ 私の脳内から不安が湧き出てくる。そんなときカメラが光った。私はガッツポーズを取りながら、興奮に震える手でカメラを掴む。そしてゆつくりとボタンを押した。

おじいちゃんが撮った写真は、倒壊したマンシヨンやマンシヨンに潰された車、阪神淡路大震災で被害を受けた写真ばかりだった。「なぜ、おじいちゃんはある写真ばかりを撮っていたのだろうか？ 私の知らないところで何が起こっていたの？」そんな疑問が頭から消えない。色々な疑問を抱えながら、その日は眠りについた。

ピ。ピ。ピ。ピ。……。

聞き飽きたレジ打ちの音をスーパーの食料倉庫で聞きながら、私はバイト仲間のまなちゃんと好きなアイドルの話をしていた。まなちゃんは、二八歳で私より七つも年上だ。とても明るくて、なんでも気楽に話しやすい。結構年は離れているが、趣味がとてもあうのでよく喋るようになった。アイドルの話が一通りおわったところで、何気なくカメラのことを話してみた。まなちゃんははじめは笑顔で聞いてくれたが、地震の話に変わった途端険しい表情になった。私は心配になり

「大丈夫？」

と聞くと、まなちゃんは右足を見ながら暗い面持ちで話し始めた。

「私の母、兄は……阪神淡路大震災で亡くなったわ。火事で燃える家の中で……」

そう、私の幸せはたった一瞬にして失われた。母の愛や兄の笑顔はなくなってしまった。

「いに大好き」

そう言いながら私は微笑む。母も父も笑っている。まるで小さな王国のようだ。私の家では犬の佐助、ハムスターのレモンを飼っている。毎朝五時頃に起きると佐助にドッグフードをあげ、レモンにひまわりの種をあげるのが私の日課になっていた。今日も同じように佐助とレモンに餌をあげる。

「レモンたんいっぱい食べてね」

そう言ったときだった。ゴーという地響きの音が鳴り、ドスンという音とともに体が突き上げられた。啞然としている間にガタガタと床が揺れ始め、

「ガシヤン！」

という音とともに食器棚が倒れた。飾っていた花瓶は床に叩きつけられ、粉々に飛び散った。母は私を助けようとしてタンスの下敷きになり、私も右足をタンスにはさまれた。兄は本棚の下敷きになり、体には花瓶の破片が刺さっていた。部屋に、

「ワン、ワン」

と佐助の声がかたまる。さつきまで、私の手のひらの上に嬉しそうに乗っていたレモンは手のひらから落ち、冷たい床でぐつたりとしていた。私はそれに気づきレモンに必死に手を伸ばし、抱き上げる。

「レモン……動いて」

弱々しい声でレモンに話しかけたが、その声はレモンの耳に届くことはなかった。しかし、悲しんでいる間もなかつた。タンスの下敷きになった右足がズキズキと痛む。

「さきこー！ まなー！ かずきー！」

父の声が鼓膜を揺さぶる。「助けて！」そう叫ぼうとしたとき、

「バンー！」

と台所から爆音が聞こえ真つ赤な炎で視界がいつぱいになった。体を必死に動かし、タンスに挟まれた右足を抜こうとするが、そう簡単にはタンスは持ち上がらない。次第に意識がもうろうとなり、私は床に倒れた。

目を開けると視界には目を赤くした父が見えた。父に微笑みかけると痛いくらい強く抱きしめてくれた。父の涙が私の髪にポタポタと落ちる。父の手は冷たかった。私は父を抱きしめ返しながら白い天井をひたすら見続けていた。

あの出来事は今までで一番怖かった。燃える炎の中で

「まな逃げて！」

と言って倒れた母を思い出すと涙がこみ上げてきそうだとまなちゃんと言った。

一呼吸置いて、まなちゃんが続ける。

「とうと、にいいには？」

そう聞くと、父は曇った顔になり黙り込んで目線をそらした。その瞬間、にいにもう会えなくなってしまうことがわかった。え……どういうこと？　なんでにににが？　あんなに優しいにににが。ににには何も悪くないのに。なんでもう会えないの？　わかっているけどすぐに頭では理解ができなかった。普通にあつた毎日、そこまで大切にしていなかった毎日、家族との会話、何もかもがずっと続くと思っていたのに……。あの揺れのせいですべてがなくなってしまった。目には見えない心の傷は、日を追うごとに痛みを増していった。そんなとき、

「大丈夫？」

横のベッドで寝ている鈴木さんというおじさんが、声をかけてくれた。彼も家族を震災で亡くしていたのだ。おじさんとはすぐに仲良くなれた。共感できることがたくさんあつた。話しているうちに震災の出来事を気楽に話せるようになった。

「足はまだ痛むかい？」

おじさんは、私が心細さを感じたときに必ずチヨコレートをくれた。

「おじさんもあなたと同じように家族を失ったんだ。なぜ、僕なんかが生きて、父が死んでしまったのだろう？　と何度も自分を責めたよ。きつと何年経つてもこの悲しみが消えることはないだろうね。父の笑顔思い出すと心が締め付けられて、涙が止まらなくなるよ。まなちゃんも一緒だろ。でも夢で父にあつたんだ。元気な父に。そして、笑顔で何事も頑張れよって言ってくれたんだ。おじさんはまだ全然元気じゃないよ。まだ何もする気になれない。でも、それじゃ天国の父は喜ばないと思つたんだ。だから、おじさんは早く右腕の傷を治

して被災した人たちのお手伝いをしようと思う。父の分まで頑張つて生きようね。だからまなちゃんも、一生懸命に生きて！ みんなのために」

そう言いながら私の小さな手をそつと握りしめてくれた。

「今でもこの言葉を思い出すと勇気をもらえるの。嫌なことや辛いと思うことがあっても、ひとりじゃないって。家族の分まで頑張つて生きようと思えるの」

まなちゃんはそう言い残してレジ打ちに行つてしまった。まなちゃんにこんなつらい過去があつたなんて想像できなかった。いつも笑顔で明るくて優しくて一生懸命で。それはきつと、お母さんやお兄ちゃんの分まで頑張つて生きているんだと思つた。そんなことを思うと目頭が熱くなつた。誰かのために生きてきたことがあるだろうか。そんなことを考えながら、今ある日常に少し感謝した。

バイトが終わると早々に家に帰つた。家族におかえりの挨拶もせず部屋へと急いだ。カメラを見ようと電源ボタンをつける。そのときガチャツという音とともに、

「もー、帰つてきてるんだつたら、ただいまぐらい言いなさいよ」

と愚痴を言いながら、母が部屋に入つてきた。私は急いでカメラを隠そうとしたが手を滑べらし落としてしまった。

「あつ、ただいま」

母と私の間には変な空気が漂っている。少しの沈黙の後、先に口を開いたのは母だった。

「そのカメラどこで見つけたの!？」

母の声には懐かしさと驚きが含まれていた。

「おじいちゃんの部屋を片付けてるときに見つけたの。お母さんはこのカメラについて何か知ってる？」

今言わなければ次はない！　　と思い、私はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「ええ。だいぶ昔の話になるわ」

母は話したした。

「おじいちゃんは写真を撮るのがとても好きだった。内向的で人と話すのが苦手な人だったけど、とても優しい人だった。おじいちゃんが撮る写真にはいつも温もりがあったわ。私の七五三や入学式、卒業式、人生の節目のときには、思い出を必ず写真に残してくれたの。今でもリビングに写真がいっぱい飾つてあるでしょ。あの写真はおじいちゃんが撮ったものばかりなのよ。おじいちゃんたら、家に飾つては番茶を飲みながら嬉しそうによく写真を眺めていたわ。数台あるカメラの中でも特別大切にしていたのが、おばあちゃんからプレゼントされたそのカメラよ。大切な写真はすべてそのカメラに入っていると書いていたわ。まあ、お母さんには落とすと危ないからと言って、写真を見せてくれなかったけどね」

「そんな大切なカメラだったんだね」

カメラの重みを感じながらそつとレンズを覗いてみる。おじいちゃんがカメラを持って写真を撮っている光景が目に見えた。

「で、何かカメラの中に残ってたの？」

「こんな素敵なカメラに震災の写真が入ってたなんて母が知ったらどう思うだろう？ それに祖父は、震災の写真なんて怖いし暗いし、誰にも見せたくないかつたのだろう」そう思っていた。そのときの私は、まだ本当のおじいちゃんの気持ちを知る由もなかった。

「貸して。見たかつたの」

母は嬉しそうに私にカメラを渡すように言ったが、祖父が今まで母に一度も見せていなかった写真を見せてもいいのか戸惑った。そんなことも知らずに、母はカメラを取り上げると、じつりと一枚一枚写真を見つけた。

「おじいちゃん、こんな写真を残していたのね。気になっていたの」

母は微笑み懐かしそうな表情をしているようにも、少し悲しそうな表情をしているようにも見えた。

あの日、母はいそいそと台所でいつもどおり私のお弁当をこしらえていた。ストーブの上にはやかんが置いてあり、湯気がもくもくと立ち上がっていた。父はお気に入りの椅子に座って日課である神戸新聞を読みなが

ら、ゆつくりとコーヒーを飲んでた。

「おはよう」

私は眠たい目をこすりながら、家族にいつもどおりの挨拶をして歯磨きをしに洗面所へ行つた。蛇口からでる冷たい水で顔を洗うと眠気はどこかに飛んでいったようだった。「今日の登校も寒いかな？ マフラーいるかな？」などと考えながら歯を磨こうとしていたそのとき。ゴゴゴゴとすごい音とともに視界が揺れ、体がグラリと傾いたと思つた瞬間、地面に叩きつけられていた。その間も家具が倒れる音や母の叫び声が部屋の中に響く。早く終わつて！ 誰か助けて！

「お父さん。お母さん」

一心不乱に叫び、助けを求めた。

「大丈夫か！」

リビングから父の声がかすかに聞こえた。少しほつとしたが、揺れが強く身動きがとれないことに気が動転した。幸い私の家は新築だったため、全壊にはならなかったものの扉は外れ傾いており、天井が今にも崩れ落ちてきそうだった。

「キヤー、助けてー！」

足の裏は血で真っ赤に染まっていた。ズキズキと足が痛む。床には花瓶や窓のガラスなどの小さな破片が飛び散っていた。私は吃驚した。今まで痛みをそれほど感じなかったのは、いろいろなことが起こりすぎて気が張っ

ていたからだろう。どうやって家から脱出したのかは今でもよく思い出せない。本当に生き延びただけでも奇跡だった。ただ家族でここにいられることに感謝した。

そして、避難生活は始まった。避難所は近くの学校の体育館だった。たくさんの人が一斉に集まったせいで、各自飲み水を確保するのもままならない状態だった。数少ない水道には長蛇の列ができ、生活の場所はダンボールなどの簡素な仕切りで作られたスペースに家族三人身を寄せあうのが精一杯だった。さらに厳しい寒さが追い打ちをかけた。火災のおそれや電気容量の問題から暖房機器が使えず、寒さを凌ぐためになんとか毛布を確保しようとするが足りない。トイレも水を流すことができなくなり汚物の山ができていた。

「父ちゃん。お腹すいたよ。早く家に帰りたいよ。お母さんはどこなの？」

五歳くらいの子の男の子の声が隣から聞こえた。

「おにぎりしかないの？ お母さんのおでんがたべたいよ……」

兄も父も無言のままだった。少し間があつただろうか。

「ごめん、ごめんな。母ちゃんを助けられなくて」

震える声でおとうさんがそう答えると、男の子のすすり泣く声だけが聞こえてきた。

私は、ぼーっと遠くを見つめながら耳を傾けるしかなかった。母を失くしたその子の気持ちなんてわかることができなかったから。歯がゆさだけが残った。

避難生活が始まってから一週間が過ぎる頃、救援物資が届き出した。空腹ではなくなりつつあつたが、も

との生活にもどれる兆しはまったく感じられなかった。月日が過ぎていくだけの毎日は、思った以上に不安と焦りだけが大きくなつていくように思えた。

「体がだるいし、眠れない……」

そんな症状を訴える人が日に日に増えていった。目には見えない大きなストレスを抱える多くの被災者の体を蝕んでいたのだろう。仕事を失い、家族を失い、一寸先の未来のことさえ考えられなかった。仕事を失った父もその一人だった。

震災発生一ヶ月後、抽選にあたり私たちは仮設住宅に入ることができた。本当に奇跡だと思う。私はまだ学校の避難所で生活をしている人のために、ボランティアにいくことにした。まだ苦しい生活を送っている人がいると思うと耐えられなかった。私たちが助けてもらったように今度は私が助ける番だと思う。

それから二週間、私はボランティアとしてお弁当を配つたり、歩くのが困難な人のお世話をしたりした。いっしょにお弁当を配つたときに見せてくれる避難所の人たちの笑顔がとても好きになつていた。その笑顔を見るたびに、じんと心が温まった。私が介護していたおばあちゃんはボランティア活動を辞めるときに、生活が苦しいにもかかわらず花束をプレゼントしてくれた。

「あつこの写真。懐かしい」

母は少しの間その写真を眺めていた。

「ここでみんなでおもちつきをしたの。おばあちゃんはおもちにトッピングをするかかりだね。避難所にいた斜め向かいのたまきおばあちゃんは慣れた手付きでとても器用におもちを丸めていたの。おばあちゃん、もともとは老舗の和菓子屋さんを営んでいたの。ほんとに楽しかったわ」

その写真は、避難所の向かいにある半壊した建物の前で撮った集合写真だった。建物は崩れかけているのに、そこに写っているみんなの顔はなんともいい笑顔をしていた。

「ここでは、みんなが家族だったというか。苦しいときも助け合ったというか……。この場所ではひとりで生きてはいけない人がたくさんいたの。何もかもが十分ではなかったけど、なぜか私はひとりじゃないと思えた」

そう話す母の横顔は少し微笑んでいた。

そのとき初めて、おじいちゃんのカメラに残された写真の本当の意味がわかったような気がした。震災、それは過酷な体験であることに間違いはないが、震災をとおして築かれた苦楽をともにした仲間との深い絆、それは決してつらい思い出ではなかったことを残したかったのだ。そして、この写真から笑顔が生まれ、少しでも生きる希望を持ってくれたらと。私は話を聞きながら母と顔を見合わせて笑った。

「ねえ、まなちゃん聞いてほしいことがあるの」

私はスーパールの食料倉庫にまなちゃんを呼び出していた。

「まなちゃん前、震災の話をしてくれたでしょ」

「うん」

「その後私の家族が震災にあつたときのことを母にも話をしてもらつたの」

「そう」

「まなちゃん、私は震災について今まで深く考えたことがなかつた。つらいことは早くみんな忘れてしまえばいいとさえ思つてた。でもそうじゃないつて気づいたの。心に深い傷を負つた人が過去を忘れることなんかできない。その傷を癒せるのは人进行いやる心なんだと。まなちゃんが鈴木さんに助けてもらつたように。私の母が、震災によつて深い絆ができたように」

私はどうしてもそれをまなちゃんに伝えたかつた。

「まなちゃん、私にできることがあつたら何でも相談してね」

彼女の目には一筋の涙が流れた。きつと何十年も苦しい思いをしてきたに違いない。私はまなちゃんの背中にそつと手を当て、私よりも小さな体を抱きしめた。まなちゃんの今までの傷を全て包み込むように優しく。

おじいちゃんへ

こんな素敵なカメラを残してくれてありがとう。このカメラはおじいちゃんが死んだ後も私に震災のつらさと大切さを教えてくれたよ。まだまだ、震災の傷が心に残っている人はたくさんいると思う。そこで「震災にあ

つた人たちの心を少しでも楽にできたらいいな」という思いから、私は震災の語り部活動を手伝うことにしました。語り部活動をやっている人はみんな優しくて意外と若い人たちが多かったです。震災の話を聞きにきてくれる人たちはいつも熱心に聞いてくれるんだ。私は今を大切に生きていこうと思う。お母さんやおばあちゃんはおじいちゃんの死を忘れられなくておじいちゃんの部屋に入らなくなっただけどそれは違うと思う。私とお母さんとおばあちゃんに言ったんだ

「おじいちゃんの死を忘れなくていい。だって、おじいちゃんはずっと心のなかにいるから」

そうだよね、おじいちゃん。あつ、もつと言いたいことあつたけど、お母さんに呼ばれたからそろそろ終わりにするね。いつでも私たちは心で繋がっている。このことを忘れないでね。

私はこの手紙とともにカメラを元あつた場所に戻し、祖父の部屋の扉をゆつくりと閉めた。

兵庫区の被害

死者	五五四人
負傷者	一七五五人
全壊	九五三三棟
半壊	八一〇九棟

震災そして復興、9つの人と人との物語・長田区、 心開いて 千竈結菜

夏の日差しが眩しかった。セミの鳴く声が響く部屋で陽子は椅子に座り、健は届いた暑中見舞いを机に並べていた。

「母さん。こんな日くらい、ドライブにでも行こうよ」

「嫌……気乗りしないの。アンタも、早く帰りたい。私なんかのお世話して、いいことないわよう……」

健の表情が一瞬だけ曇った気がした。が、また笑顔に戻り暑中見舞いから陽子に視線を移した。

「そっか……じゃあ、一緒に料理しない？ 卵焼き、教えてほしくて」

「アンタはお嫁さんに聞きゃあええ話でしょ」

机の上のハガキが一枚、はらりと畳に落ちた。

「お母さんの甘い卵焼きがいいんだ」

「レシピ、冷蔵庫に貼ってあったと思うから。持って帰り」

つられてハガキがすべて畳に落ち、ぐちゃぐちゃになった。

陽子はじつと畳を見ていた。健はかける言葉が見つからなかったのか、いそいそとハガキを集めて整えたあと、そのまま畳に並べた。

「……次は嫁と息子と来るよ。孫の顔を早く見せてあげたいよ、お母さん」

健は努めて明るく話しかけた。が、陽子の表情は一向に明るくならず、それどころか健の顔を見ることさえしなかった。

「知らないわ……アンタはアンタで幸せになり」

「……スイカ、冷蔵庫入れとくね」

健は溜息を付いて、荷物を片し始め、陽子に背中を向けたまま、ありがとうと呟いた。陽子は畳を眺め続けていた。

その日は日差しはあつたけれど、風が吹いていて比較的涼しかった。陽子はただひたすらにぼうつと縁側に座っていた。

「おばあちゃん！」

見知らぬ少年が駆け寄ってきた。半袖に半ズボン。赤色のキャップをかぶっていた。年は七つか八つくらいだ

ろうか。陽子は自分のことだとは思わず、気にしていなかった。

「おーい、ばあちゃん？ 何してんの？」

陽子は頭をさも重そうに上げ、少年の方を見た。くるみのように丸い目と目があった。

「何してんの？ あ、わかつた。ヒマなんですよ？」

ああ、私のことなんだと思い、陽子は虚ろな目で少年を見ていた。が、少年は恐れもせずたじろぎもせず、そこにじつと立っていた。

「お母さんのところへ帰りなさい」

陽子は少年の靴を見て言った。少年は聞いていたはずだが、陽子の隣に座り、陽子の顔を覗き込んだ。そして、にっと笑ってみせた。

「俺ね、陽一つていうんだ。太陽みたいに輝く長男、つて意味なんだよ？」

陽子は陽一の目を見た。光を受けてビー玉のようにきらきらとした二つの瞳には、陽子が映っていた。

「おばあちゃんの名前は？」

ににこしたまま聞いた。陽子は普段、うざつたらしく思うのを、このときばかりは不思議と答える気になった。

「陽子。太陽の陽に、子供の子」

陽一は少しの間きよんとしていた。こんなに暗い雰囲気の老人がまさか自分の質問に答えてくれるとは

思わなかったのだろうか。そしてその後、ぱつと明るい顔をした。

「おばあちゃんとお揃いだ！」

さも嬉しそうに言った。陽子は表情がほろびそうになるのをぐつと抑え、立ち上がって部屋の中へ入ろうとした。

「おばあちゃん？ どこ行くの？ 俺もお部屋入っていい？」

そんな声を陽子は無視した。さつきより一層暗い顔をして、陽一に背を向けて早足で歩いていった。涙がこぼれそうになるのを堪えていたが、その目は潤んでいた。

「ばあちゃん！ ねえ！」

涙が落ちた。袖で目を拭つても溢れ出てきて、キリがなかった。袖が濡れていく。

「なあ……え、泣いてるの？」

陽一が靴を脱いで陽子に近づいた。陽子はその場に座り込んだ。畳を見てただひたすらに泣いていた。陽一は最初こそ戸惑っていたが、陽子の横にしゃがみ込み、ただただ背中をさすっていた。

どのくらい経っただろう。陽一は何も言わずそこにいたが、申し訳なきそうにその場を離れ、靴を履いて走っていた。陽子の涙はもう止まっていたが、動く気にはなれなかった。

「ごめんね……」

見えなくなった陽一に向かって放った言葉だった。服の袖や畳はもうとくに乾いていて、陽子はどこからか

来る虚無感に襲われた。

自分以外誰もなくなつた部屋の中で、健が並べていつたハガキを見ていた。返事を書く気にはなれなかつた。

少し時間が経つと、重い体を持ち上げて立ち、椅子の上に置いてある小さいカバンを持って外へ出た。足元を歩いている天道虫を踏まないように、道端に咲いているタンポポを踏まないように、ゆつくりと歩いて墓地へ向かつた。

「原田家之墓」の文字が刻まれた墓石の前に立つていた。二十分ぐらい経つてからはつとして、陽子はまた動き出した。花の水を換え、カバンからロウソクとライターを取り出して線香をあげた。

「光さん……」

無意識に声が漏れたのに陽子は気付いていなかった。手を合わせた。煙が空中に線を描いた。陽子はそこにいるものが目に入つて、はつと息を呑んだ。

「……ばあちゃん？」

陽一だつた。一人で来ているのか、両手に枯れた花を持っていた。その花が地面に落ちた。陽子は落ちた花を見ていた。

「ばあちゃん！」

突き飛ばされたかと思つたが、ぐつと踏ん張つた。下を見れば、陽一が抱きついてた。

「……ばあちゃん、ごめんね」

陽一がボツリと言った。陽子は自分の台詞なのと思った。そして、これではどちらが子供なんだか、とも思った。

「全然、いいのよ」

思いついた選択肢にはない台詞が溢れ出た。陽一が涙を流しているのを見て陽子はまた泣きそうになった。ぐつとこらえて陽一の両肩を優しく掴み、自分から引き剥がした。掴んだ肩の小ささに、相手は幼い子供だと改めて感じた。

沈黙に耐えられないわけではなかった。でも陽子はふにやつと気の抜けた笑い方をして陽一を見た。陽一は嗚咽をこらえていつと笑った。蟬の声も聞こえず、落ちた花も見えなかった。

二人で墓参りをするようになった。

「誰のお墓？」

陽子が口ウソクに火をつけたあとに言った。

「俺のお母さん」

陽一はじつと墓を眺めていた。陽子はその横顔が大きな悲しみを孕んだものであることに気が付いて、涙が出そうになるのを抑えようと陽一と同じ様に墓を眺めた。

無言で、人で手を合わせた。このときはかりは下を向かなければならないので、陽子は涙がこぼれそうにな

った。

「……お母さんね、五歳のときに死んだんだ。まだ覚えてるよ」

表情を変えないまま陽一がそう言うので、陽子の方が悲しくなった。

「つらくないの？」

震える声で聞いた。陽一は陽子を見てまた、にっと笑った。

「つらくないよ！ お父さんと二人で幸せだし、悔しくもないもん」

笑顔のまま言った。陽子は目の前の少年を心の底から尊敬した。笑顔を作ったつもりだが、うまく笑えていたかどうかはわからない。

「そう……ああ。この後私の家に来る？」

首を傾げ陽子がそう言うと、陽一はぼかんとしてしまった。なにか変なことを言ってしまったかと考える。

「いいの？ この前勝手にあんなこと……」

あんなこと？ と陽子は考えた。勝手に家にながったことだろうか、と考えていれば目の前の少年がにっこりと笑っていることに気がついた。

「ありがとう。おばあちゃん」

「行こうか」

陽子も笑った。その日は涼しかったけれど、陽子は暑すぎるぐらいに思った。

「あー！」

突然の陽一の大声に陽子の肩が跳ね上がった。陽子はここで何かと理由をつけて断られることも考えた。

「お花！ 落としてからそのまま！」

陽一があまりにも大事のように言うので、陽子は笑いが堪えられなくなった。陽一が走って取りに行つて、走って戻ってきた。息を切らしながら笑っていた。

「一緒に、帰ろうか」

陽一は少し緊張しているのか、硬い表情をして座布団に正座していた。陽子も同じく緊張していて、冷蔵庫からスイカを取り出す手付きがたとえどしかなかった。

「スイカは好き？」

陽一は硬い表情のまま頷いた。話題の種がなかなか見つからず、陽子がスイカを切る音だけが部屋に響いた。

「……ばあちゃん。あれ、誰のお墓？」

「私の大事な人……夫よ」

なぜ言ってしまったんだろう、と陽子はまるで他人のことのように不思議に思った。陽一は少しの間黙っていたが、小さな声でごめん、と呟いた。

「気にしないで。もう随分前の話……阪神淡路大震災、つて知ってる？」

それを聞いて少し考えていたのか、陽一は目を閉じて、うーんと唸った。

「知ってる。今学校の授業でやつてるから……でも、全然わかんないんだ」

「わからない？」

陽子が首を傾げた。学校の授業についていけないんだろうか、と一瞬不安にかられた。

「だって、前に終わった話でしょ？　いくら悲しいことでも体験していないから、わからないんだ」

陽一が陽子の方を向いていた。陽子はスイカを切り終わってお皿に並べ、陽一のところへ運んだ。そして陽一の向かいにある座布団に座った。

「私ねえ、そのとき、友達と息子と泊まりで出かけに行つたの」

陽一は相槌を打ちながら聞いていた。陽子は先ほどより悲しい表情になっていたが、それを誤魔化すようにスイカをひとくち食べた。

「六時ぐらいかな。友達に叩き起こされて。ん、このスイカ甘いよ、お食べ」

陽一が目線を陽子に向けたまま、スイカをかじった。

「いろんな番組が切り上げられて、全部緊急速報でね……酷かつたわ」

みるみる陽子の顔が悲しそうなものになっていくので、陽一は何か言おうとしたが、ぐつとこらえて聞いている。た。

「帰るにも帰れずね……あの人がもういないってわかつたのはそれから二日経って、友達からの電話で。その

ときは、ちつとも信じてなかった……」

陽一も陽子も話に夢中で、スイカは皿に置いたままになった。

「……ようやく帰つて、実感が湧いたわ。並べられた遺体を見て、いい氣をした人はいないでしょうね……」

「……後悔してる？」

「当たり前よ。あの人が私と健を残して死ぬんだつたら……私も健も、三人で一緒に死ぬばよかったのに」
こんな子供に言つても、と陽子は思った。会つて間もない子供にこんな話をしている今の状況が、陽子には信じられなかった。

「あの人は私を置いていったの。原因は私よ……あのときそばにいてあげられなかった。ずっとそばにいたかつた……」

「おばあちゃん、違うよ」

陽子はきよんとしていた。そして、何も知らない子供に否定されたくないとし疎ましく思った。

「誰も、置いていきたくないなんて思つてないでしょ。誰も、予想してなかったんだもん」

陽一は下を向いてスイカを食べた。たくさん水滴が落ちた。

「もしそのときおばあちゃんが死んじやつてたら、俺は今日一人だつたんだよ？」

震える声でそう言われて、陽子はハツとした。こんなに小さな子供に氣付かされるなんて不甲斐なかった。

「……そうね。そうよね。ごめんね、ごめんね……」

陽子が泣き崩れた。とめどなく涙が溢れてきた。陽子は恥ずかしいとも情けないとも思わなかった。陽一もいつからか泣いていた。

蟬の声がうるさいくらいに響いていて、嗚咽は夏の空にかき消された。

その日から三日。陽一は陽子の前に現れなかった。

陽子はずっと陽一のこと頭がいっぱいだつた。陽子にとって、自分の身の上話をしたのは震災以来初めてだったからだ。

「馬鹿ねえ……」

多少の後悔と達成感が陽子の中でぐるぐると回っていた。ところで、陽一は何歳だつたんだろうか？ 誕生日は？ 血液型は？ 陽一のことを何も知らないことに気がついた。そんな相手に自分のことばかり喋ってしまったという後悔と羞恥心がぶわつとこみ上げてきた。

冷蔵庫を開くと、切ったスイカが残っていた。早く食べなければ傷むとわかつていても、もしかしたら、と心の中に残っていて食べきれなかった。

「よいしょ、と」

重い体を持ち上げて座布団に座った。まだ畳に置いてあつた暑中見舞いを集め、ペンを持ち、返事を書くかと思つた。それもあまり気が進まず、三枚ほど書いて終わってしまった。その書いた三枚を郵便局へ届けに行く気にもなれず、また座つたままぼうつとしていた。

もう陽一は来ないんだろうか、と陽子はふと考えた。陽一に話してしまった後悔もあつたが、それ以上にあまりにも陽一のことを知らないことが悔しかった。

「母さん！　　おい！」

縁側の外から声がした。陽子は一瞬期待した。が、その期待は外れてしまった。そういえば、おばあちゃんと呼ばれていたなと思つた。

「母さん。久しぶり……ていつても、一ヶ月ぐらいか」

健と、子供を抱いた女性だつた。陽子と目が合ったのか、ぺこりとぎこちなく会釈し、健に続いて歩いた。

二人は縁側で靴を脱いで座布団に座つた。

「お母さん、俺の嫁と、子供だよ。アンタの孫だよ」

健はへらつと笑つて陽子の方を見た。すると、眠っていた子供が泣き出した。

「寝起きたから……外出たほうがいいかな」

「いや、いいだろ。どうしたー？」

二人で子供をあやしている姿を見て、陽子はなぜか涙が溢れそうになつた。歩いていつて、冷蔵庫を開けた。三人なら食べ尽くせる量のスイカが目に入ったが、まるで見えないふりをするようにその横の麦茶が入つたボトルを取つた。

三つの背の低いグラスに麦茶を注いで、盆に乗せて机まで運んだ。

「おう。ありがとう」

健はぶつきらぼうにそう言った。あまりにも子供が泣き止まないで、健が子供を抱いて外へ出た。

「……初めまして。お義母さん……美幸と申します」

女性が口を開いた。遠くの方で聞こえていた子供の泣き声がやんだ。

「困っていない？　あの子は昔から、言葉足らずなところがあるから。」

陽子が首を傾げた。麦茶を一口飲んで、また美幸の方を見た。

美幸はぼかんとしていた。陽子をじつと見つめた後、ここに来て初めて笑顔を見せた。

「……ちよつと何するかわからないときもありますけど、幸せです」

陽子も気が抜けたように笑った。すぐに健が戻って来た。

「私の孫の名前は何ていうの？」

「……光介だよ」

健が光介を陽子に抱かせた。陽子が優しく光介を腕に抱いて揺らすと、光介は嬉しそうにキヤッキヤと笑った。陽子は目を赤くして笑顔を浮かべていた。

健の車の前まで三人について行つた。

「またね。いつでも待つてるから」

健が運転席の窓を開けた。

「……丸くなつたね、母さん」

陽子がきよんとした。そしてその原因に気づいて、ふにやつと気の抜けた笑い方をした。

「三人一緒に、幸せになつて。それから、ちよと私にもわけてね」

健が窓から片手で手を振つてから、車の窓が閉まつた。陽子からその表情は見えなかつたが明るい気持ちになれたのは言うまでもない。

ある夏の日。陽子は家から一番近い小学校を訪れていた。教室の扉を開けると、生徒たちの好奇の目が集まつた。

「初めまして。今日は、震災のことについて皆さんに教えに来ました」

生徒たちの拍手の中に、一人見覚えのある少年の顔があつた。

長田区の被害

死者	九一九人
負傷者	五三二人
全壊	一五五二一棟
半壊	八二八二棟

震災そして復興、9つの人と人との物語・東灘区

思い出の日記

松下文柔

休みの日、毎週通っている図書館へ行つた。大学生になつてからずつとお世話になつてゐる、心落ち着く場所だ。ある本を借りようと奥へと進んでいく。本の群れを目でなぞりながら見つける。取ろうとするとあまりに高いところにあつたもので、手が滑つて本を落とし、肩に当たつてしまつた。みつともないことに隣りにあつた本も一緒に。はあ、と心のなかでため息をつき、拾い上げた本の題名が目に入つてはつとする。私はそのまま二冊の本を胸に、テラス席へと急ぎ足で向かつた。そこは、私の一、二を争うお気に入りの場所だ。

新緑の季節。入り口のドアを開けると、後れ毛とポニーテールが優しくゆらめく。私の他には、誰もいない。心地よい薫風を受けながら木製の椅子に腰を下ろした。もう一度本の題名を今度はいつかりと見る。『TITの悲劇』……。作者は田原美菜。私の母だ。そして、私はこの本の一読者であり、登場人物でもあるのだ。

「どうしたんですか？」

いきなり、男の人に話しかけられた。

「えっ、なんでもありませんよ。いつの間にいたんですか……透さん」

透さんは最近この図書室で知り合った、趣味も話も合う、ちょっとした友達みたいな人。

「ついさっき、テラス席に来たら舞さんが涙ぐんでいたからどうしたのかなって」

涙ぐんでたんだ、私……。

「僕でよかつたら、相談乗りますよ」

その言葉は私の心を揺さぶった。私は誰かに伝えたかったのかもしれない。

「ありがとうございます、でも、相談っていうものではないんです。ただ、誰かに聞いてほしくて。実は、私がまだ幼かつたときの話なんです……」

「なあなあ、なんでまいちゃんのがみのあてなのとにおかあさんのなまえしかないん？　おとうさんおらへんの？」

私が神戸市東灘区の幼稚園に通っていたときのこと。先生が出した『いつもお世話になっている、おうちの人への感謝の手紙を書こう』という企画で、友達のなつきちゃんと一緒に心を込めて手紙を書いていた。その作業中、封筒に手紙を入れてのりで封をするとき。封筒の表には、間違いがないようにおうちの人に書いてもらった住所がある。そのとき、おかあさんの名前しか書かれてない私の封筒の宛名を見て、なつきちゃんが不思議に

思い、口にしたのだ。」「おとうさんいないの」と。この言葉は、私がずっと気にしていたこと、心の深い傷跡にぶつかり、何も答えることができなかった。みんなにはおとうさんがいるのに、私だけいない。だから、おかあさんは働きの出ている。兄弟のいない一人っ子の私は、ずっと家で一人ぼっちで過ごすしかなかった。少し前に、なつきちゃんのおとうさんが保育園に迎えに来ていた。私は、耐えきれずにおかあさんに聞いてみた。

「わたしに、おとうさんつているの？ あと、わたしにもきょうたいがいたらなあゝ」

私は、別に深い意味で言ったわけではなかった。でも、おかあさんは目をそらしてとても焦っている様子。どうしたんだろう、と首を傾げると

「ああ、……お父さん？ 舞の、お父さんはね、外国に、出張に行ってるのよ……。そうね、お母さんも、一人っ子だから、舞の気持ち、よくわかるわ……」

ふうん、わたしもおとうさんにあいたいなあ、そう思ったただだった。でも、それと同時におかあさんのとても悲しそうな顔が胸に刺さった。この日から、母は事あるごとに

「お父さんがいなくてごめんね……」

と私に言い、ひどいときには泣いてしまうことがあった。

小学生になつて、小数の掛け算の筆算ができるようになったら、少しずつ私もおかしいと思い始めた。海外出張に行っているって、こんなに長いことがあるのかな、と。もしこれが本当に出張なんだとしても、私はお父さんと会つて話したこともない……。お母さんにお父さんに会いたいと頼んでみようかと思ったりもした。が、保

育園児のときに見たあの悲しそうな顔が忘れられない。もちろん、なつきちゃんたちがお父さんと遊んでるときはうらやましくて、つらい。でも、私はお母さんの悲しんだ顔を見るのが世界で一番つらかったのだから、聞こうにも聞けなかった。お母さんに甘えてばかりはいられない。もう私も小学生。私の住んでる神戸市東灘区の地理ならだいたいわかる。小学校の授業が終わった後、家に帰ってから自転車で東灘区を回ることが、私の遊びとなっていた。そのおかげもあって、たくさんの人と顔見知りになり、仲良く話すようになっていった。この時間は私に兄弟がいらないこと、お父さんに会えないことを忘れさせてくれた。特にある中学三年生の男の人と話をする時間がとても好きだった。

その人の名前は透くんという。私が東灘区をうろうろしている中で一番仲の良い人だ。なぜかというところ、透くんは遊び上手に話上手、聞き上手だ。遊びはとにかく楽しい。新しい遊びをどんどん作ってくれる。話も、話しているだけでこんなに夢中になったことはない。私の話だつて興味津々に聞いてくれる。そして、私の相談相手にもなってくれる。私たちは遊び疲れた後公園の木の上に登って落ちないようにしつかりとつかまりながら話している。

「透くんって、お父さんと兄弟とかつて、いるの?」

「ああ、いるよ。父さんと双子の弟が。どうしたんだい?」

「私ね、兄弟もいないし、お父さんも外国に出張中なの」

「えっ! 舞ちゃん家で一人なの!」

「うん、家では寂しいけど、こやつて東灘区をうろうろしてたら透くんみたいな優しい人とお話できるから、いいの。でもちよつと、最近私のお父さん、本当にいるのかなつて思えてきて……」

「どんなことがあつたの？」

「ううん、別に何があつたとかじゃなくてお父さんがもういないのかもつて思うの。だつて、どんなに忙しいからつて、私に未だに会わないお父さんなんかいるのかなつて……」

透くんは心にためていたすべてを吐き出すと涙が出てくる。透くんには心を開けている気がする。

「大丈夫だよ。舞ちゃんのお父さんは絶対に会いに来てくれる」

「本当に……？」

「ああ、本当だ。だから、笑顔でいないと。そんなに泣きそうな顔をしていると、お父さん、悲しむよ？」
すると帰りのチャイムが鳴つた。

「おつと、もうこんな時間から、舞ちゃんと話しているとすぐに時間がすぎるな！」

そう言つて透くんは優しい笑みを私に向けてくる。自転車にまたがった私は

「じゃあねー、透くん、ばいばい！」

と手をふる。そうしたら、

「ばいばい！」

と満面の笑みのまま大きく手を振り返してくれる。いつそ、透くんが私のお兄ちゃんだったらいいのに。そう思

う日も少なくなかった。

やがて、私は中学に入学することになった。それを境に透くんに会うことは少なくなつた。なぜなら、もうそろそろ本気で勉強をしないといけないから。もうこの頃になると、母を悲しませないために、どう接すればいいのかわかってくる。

「お父さんがいなくてごめんね……」

と言われても、

「大丈夫！ 全然気にしてないから！ 私はお母さんだけで十分だし」

これがいつもの会話に入るようになっていた。この後母は、

「ありがとう、舞は本当に優しい子だねー」

と、私の喜ぶ言葉をかけてくれる。笑ってしまう私につられて母も笑いいつしか「お父さんがいなくてごめんね……」という胸苦しかった言葉は、笑顔につながる言葉になっていった。今日、私は小学生の教科書など、一式をしまおうと部屋を片付けていた。これで最後の荷物だ。重い重い荷物をなんとかすべて物置の中へ置き、そこから出ようとしたとき、物置の中で青いアルバムを見つけた。お母さんの卒業アルバムかな、と思い開いてみた。そこには若い母と男の人が一人、写っている。そんな写真が何枚も出てきた。「京都旅行」、「温泉巡り」、「紅葉狩り」……。次にページをめくったとき、はつとした。「結婚式」……。ここに写っている女の人は確かに母だ。そして、横にるのが、私のお父さん!! そのときの私は、父を見ることができた嬉しさに任せて、青いアル

バムとともに母の元へと走っていった。

「おつかあさん、ここに写ってるんって私のお父さん!？」

母は一瞬びくくりした様子で、それでも冷静を装って、

「ええ、そうよ」

とだけ言った。もう、それならそうと早く言ってくれたらいいのに。

「お父さんって、いつ帰ってくるの?」

「今のところ、帰っては……来られない、みたい。でも、……その代わりに、手紙を、お正月の日に、送ってくれるって」

「やったあー!」

母の言い方に少し違和感を覚えながらも、ずっと会いたかった父の、手紙が見られる! と、お正月を楽しみに、毎日を過ごしていた。

外は冷え冷えとして、風がビュービュー吹いている。中学生、初めてのお正月になった。おせちを食べて、お年玉と一緒に渡されたのは、ずっと心待ちにしていた父からの手紙。母が手渡してくれた手紙を見ると手書きで、

あけましておめでとう。僕も、舞に会いたいと毎日思っています。ずっと会えなくてごめんね。僕も頑張るから、舞も、いい子で過ごしてね。 舞のお父さんより

中学一年生のときの私はそれが嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。中学二年生、三年生のお正月もこんな感じの手紙が続いた。私は、嬉しかった。でも、気になることが一つ。この手紙、母の字とても似ている。自分の意志に関係なく考えが広がって、もやもやした気持ちはずっと続くのは嫌だった。私は中学三年生のお正月、母との初詣に行くとき、思い切ってお母さんに聞いてみた。

「ねえ、お母さん。私のお父さんつてもういないよね？ 外国に出張に行ってるって嘘だよね？」

「なんで……そう思うの？」

母は明らかに動揺していた。

「中一からもらってるこの手紙、お母さんの字でしょ？ なんで手紙をくれるようになったのが中一からの？ それに、こんなに長い期間帰ってこないのは、おかしい。あとは、小学生の時の見つけた青いアルバム、私の生まれた日からお父さんが写ってない」

最後は私も涙声になってしまった。すると、母はゆつくりと話し始めた。

「ええ、そうね。舞のお父さんは死んでしまっているわ。それに……舞のお兄ちゃんも」

え？ 私のお兄ちゃん？

「私、一人っ子だよ？ それに、あのアルバムにもお父さんの他に男の人写ってなかったよ？」

「違うわ。舞にはお兄ちゃんがいて、お兄ちゃんもお父さんも亡くなったの。あと、あのアルバムの写真は晃が撮ったものだから晃は写ってないの。晃は写真撮るの好きだったから」

「え？ ……なにがあつたの？」

「知りたい？ 舞にはまだ早いと思つたから言わなかつただけ……」

私には覚悟ができていた。

「うん、知りたい」

すると母はバス停の近くのベンチに座り、バッグからまるで外国の本みたいな茶色に金色の英語の文字が埋め込まれている日記を取り出した。名前のところには田原美菜と書かれていた。

私には海斗という夫と晃という一人の息子がいた。晃は十八歳の高校三年生。大学受験生だ。医学部に入りたい、という本人たつての希望で今、勉強部屋で猛勉強している。せつかくここまで頑張ってきたんだから、と寝る間も惜しんで勉強している。体を壊さないか心配な限りだ。そして夫の帰りはいつも遅い。仕事で精を出してくれているんだろう。実は私は晃の本当のお母さんではない。夫にとっては再婚相手だ。もう少しすれば新しい家族がうちに来る。そう、私は妊娠してるのだ。それも元氣な女の子。臨月になる。まだお腹の中に入っているっていうのに、中から何回も何回も蹴飛ばしてくる。そのたびに、痛さ以上に、これは元氣な子が生

まれてくるんだな、と微笑ましく思う。

一月十五日日曜日。明日はいよいよ晃のセンター試験。晃の体調も考えて、晃にはなるべくいつもどおり接した。本当はもつと激励の言葉をかけてあげたいんだけど……。晃には晃の試験への心構えがあるから、なるべく刺激しないでおこう。晃、ここで伝えるね。センター試験、頑張れ!!

一月十六日月曜日。よかつた、晃、結構自信満々で帰ってきた。自己採点をしてもいい結果だったみたい。今日はちゃんと「頑張ったね」つて言えた。そうしたら笑顔で「ありがとう」つて返してくれた! 第二の母の私にも優しくしてくれるなんて。いい子に育っているんだな。私もお母さんとしてしっかりやれているのだろうか。もうすぐ女の子が生まれるんだし、私もしっかりしなきゃ。

書き終わった私はお気に入りのペンを置き、茶色の日記を静かに閉じる。今日も健康な赤ちゃんを生むために早めに寝る。歯磨きをして、勉強に励む晃にひと声かけてから布団乾燥機で予め暖かくしておいた布団に仰向けに寝転がり、静かに目を閉じる。

私は揺れている違和感で目が覚めた。布団から飛び起きると床に本が散らばっている。本棚ごと倒れたようだ。地震だ。これはかなり強い。晃と海斗は無事だろうか。急いで晃と海斗のところへ行かなければ。

「晃ー! 海斗ー! 無事ー?」

そう思った私だが妊婦だったため揺れる中は支えがないと立てない。

「あつ!! 痛つ!」

起き上がろうとした私の足だが揺れた反動ですべてこけてしまい、箆笥が足の上に倒れてしまった。どうしよう、動けない。向こうでお皿が何枚も割れた音がする。ああ、私も助けられなかったらあんなふうに粉々になるのかな……。恐怖に打ちひしがれていたそのとき、バンつとドアを蹴破る音が聞こえた。

「母さん、大丈夫かー？」

「あ、晃、晃ー！ 無事ー？」

晃だ、生きてた、よかった。リュックサックを持っている。私は晃に氣づいてもらえるよう必死で腕を大きく振った。晃は私に氣づき、私の近くに寄ってきてくれた。するとそのとき、天井から電気カバーが外れて私の赤ちゃんに当たってしまった。

「痛いっ」

「母さん！ 大丈夫か？」

「平気よ。晃こそ大丈夫なの？ どこか怪我してない？ お父さん見なかった？」

「俺は大丈夫。父さんは貴重品を持って行くから、先に避難しておいてだつてさ」

「よかつたあゝ、早くここから出て避難しましょう」

笑顔で答える晃にほつとして、そう言つた直後、壁がミシミシ言つてヒビが入っているのがわかつた。そしてそれは天井へと繋がっている……。

「あ、晃！ 危ない！」

「えっ」

気がつくとも身動きが取れなかった。揺れはおさまっているようだ。でも意識が朦朧としている。たしか、天井に、ヒビが入って……。晃がかばってくれて……。

「……………ま……………ま……………み……………ま……………」

あれ……、誰かの声が聞こえる……？

「……………みま……………」

私の名前を呼んでる……。

「……………美菜！」

この声で私は目を覚ました。目の前には海斗がいた。そして、近所の人たちが心配そうに私の方を見ている。

「よかった……美菜が目を覚ました！」

私はハッとした。

「ねえ、晃は？　晃はどこにいるの？」

「美菜、まさか晃と一緒にだったのか？」

「うん、私の部屋に……。助けに来てくれてたの」

海斗は返事を聞くや否や近所の人たちを集めて、

「晃がー！　晃がまだ家の中にいるらしい！　手伝つてくれないかー！」

と呼びかけをした。そして私に、

「美菜は誰かと一緒に病院の人に見てもらえ。妊婦だから絶対に一人で行くんじゃないぞ。そして今は自分の命を一番に考えろ。無茶はしたらいけないぞ！」

「うん、わかった。ありがとう、海斗」

そうして私は近所の人につれられ病院の人に見てもらった。幸い、私は腕に小さなすり傷をしただけで、命に別状はなかった。もちろん、お腹の子も。手当してもらい、医者や看護師が配っている非常食や小さい救急箱をもらい、段差のところに腰を下ろして休みながら考え込んでいた。晃は無事なんだろうか。すると遠くから、

「美菜おばさん、美菜おばさん、どこー？」
という声がした。

「ここよー」

力の限り返事をする。と小さな男の子がこちらへ向かってきた。ずいぶん走ってきたのだろう、男の子は膝に手を当て、肩で息をしている。私の方へ向き直ると同時に顔が見える。

「あ、透くんじゃない！　どうしたの？　私を探してたみたいだけど？」

透は頬に伝う汗を袖で拭き、私から目をそらしたと思うと、

「晃お兄ちゃんが、危ないんだって。助かるかどうかからないって……。あ、待つて美菜おばさーん！」

気づいたら私は透くんを置いて自宅まで力の限り走っていた。心の中で晃が無事であつてほしいと祈るばかり。遠くから

「晃！　晃！　しっかりしてくれ！」

「諦めないで！　自衛隊の人にも頼んでるからね！」

という各々の声が聞こえてくる。すると私の横を集団が横切った。

「自衛隊のみなさん！　来てくれたのですね」

感謝でいっぱいの海斗の声。

「はい。要救助者はどこにいますか？」

「この、天井の下にいます。晃、自衛隊の人たちにも来てもらったぞ。もう安心していいからな」

海斗が優しい声をかけるも、晃の応答がない。その様子を見た自衛隊員たちの返された言葉は、私たちにとって地獄を見せられたように儚く、冷たかった。

「すみませんが、あなたたちのような境遇に合っている人たちは数え切れないほどいます。応答がないようでしたら、私たちはまだ応答のある救助者を優先せざるを得ません。私たちはこの辺で失礼させていただきます」
しんとこの場が静まり返り、自衛隊員の去る足音だけが耳にこだましていく。これで、晃は助からなくなつたの？　応答がないから、ただそんな理由で……？

「そんなのおかしい！ 晃だつて頑張つてるんだ！ なぜ目の前に救助者がいるのに助けない!? 救助者に命の優先順位があるのか！」

いつの間にか自衛隊の中の隊長と思われる自衛隊員の腕の袖を掴んで懇願していた。海斗も後になつてくると涙声になつていき最終的には袖にしがみついて泣きながら離れようとはしなかった。そんな海斗の様子に刺激され、

「本当です！ あなたたちだつて私たちと同じ立場になつてみればわかります。目の前で家族が死ぬか生きるかのところで頑張つているのに！ 助けてやれないなんて……。どれだけつらいことか……」

と本能のまま叫んでいた。目に涙をたくさんためながら。だが、自衛隊員は振り向かず、何も言わずに去つていった。冷たい風が頬に吹き付ける。一瞬で力が抜けた気がした。膝からガクツと泣き崩れた。ああ、なんて自分は無力なんだろう。息子が苦しんでいるつて言うのに、何の役にも立たないなんて。地面についた拳に涙がこぼれた。拳をギュツと握りしめた。本当に無力な光景だな。そのときだった。

「おい、坊主、危ないからやめなさい！」

緊迫した様子のおじいさんの声が聞こえた。声のする方を見ると、透くんが晃を助けだそうとしている。そんな透くんはちらりとこちらに目配せして、

「自衛隊に助けを断られたぐらいで諦めちゃだめだ。こうしている間にも晃お兄ちゃんに危機が迫つて来るかもしれない。こういうときこそ助け合つて行かなきゃ。」

と言った。確かにそうだな。何やつてたんだろう私。まだ晃は死んでない。生きてるんだ。あきらめちや、いけない。そうして近所の人たちと協力していった結果、

「やつたあー!! 晃くん救出成功!!」

そう、晃は助かったのだ! しかし、長時間にわたって強く天井の下敷きになっていたものだから晃は今、虫の息。これではすぐに医者に見てもらわないと……。急いで担架を持つて晃を医者のところまで運んでもらう。ところが、すぐに晃の容態は悪化し、いつ死んでもおかしくないような息の弱々しさになっていた。それでも晃は口をバクバクさせてなにか透くんに言っている。少しして透くんは大声で遅れかけていた私と海斗を呼んだ。

「晃……ごめん……ごめん……私をかばったばかりに晃がこんな目にあつて……」

私は小声でこの言葉を繰り返していた。しかし、晃は

「……う、ううん、おれ……が、まもり……なくて……やつたこと……きにないで……あと、……おなかの

……おんな……のこまもり……たかつた……」

私は目が涙でいっぱいになり今までないほどのどこにもやり場のない感情を胸に、晃に覆いかぶさつて泣いた。海斗も晃の手を握りながら涙を流している。すると晃は

「……あ……りが……とう、……おと……うさん、おかあ……さん……さいご、舞と……あそび……たかつた……なあ……」

そう言うて柔らかな顔で旅立っていった。ふと、晃の持っていたリュックサックが気になった。中を見ようとチャックを開けると衣類、タオル、懐中電灯など避難に必要な物の他に、晃が大切に使っていたシャーペンと要点をまとめているノートが入っていた。もう他には入っているものがないと思い、ノートからリュックサックに戻そうとすると、何か硬い物が当たった感触がした。手で探してみるとそれは私の日記と大切なペンだった。私は声を上げて泣いた。まさか、自分が命の危機にあつてるところでまで私のことを思ってくれてただなんて。もう一度目を瞑っている晃に、心のなから声をかけた。晃、あなたは本当に……。

ひとしきり泣いた私たちは近所の人たちと別れ、避難所へと急いだ。幸い、私たちの自宅からそんなに遠くないところに晃の通っている高校があつたのでそこに避難した。体育館に着くと避難所の現場は大混乱だった。小さい子供からお年寄りまでいろいろな人がいるため、通路は狭く、窮屈な状況だった。また、一月ということもあり、とても寒かった。とりあえず私と海斗は



避難所生活に必要な食料などを片っ端からもらっていった。決して快適とは言えない空間だったが、近所の人たちとの力を合わせたことによつて生活することができた。また、海斗は、

「晃と同じ目に遇っている人がまだいるかもしれない」

と、毎日助けに行っている。そして今、私は仮設住宅に住んでいる。その、ある日のことだった。

「あのさ、こんなときになんだけど私、お腹痛い。もしかしたら、陣痛かも」

お腹が急に痛くなってきたのだ。もしかしたら出産かもしれない、とすぐさま産婦人科医に診てもらった。「うん、もう生まれるよ。このお腹痛いのも陣痛だね。早くあのテントの中へ連れていきなさい」

私は何人もの看護婦さんに付き添ってもらつて、十五時間かけて無事に女の子を出産することができた。海斗も赤ちゃんとご対面することができて笑っている。でも、正直複雑だ。晃を亡くした悲しい後に、女の子を出産することができたという嬉しい出来事なんて。これを海斗に話すと海斗もそれをわかつてくれた。

「確かにそうだな。今僕も同じ気持ちだったところだ。それだったらこの子の名前を舞にしないか？」

「どうして？」

「晃が勝手に名前をつけていつも言つてたじゃないか、『早く舞と遊びたいなあ』つて。それに僕も舞という名前がいいと思う。美菜はどうだ？」

「そうね。晃ががせつかく付けてくれた名前だもんね。それに、この子の命は晃が助けたからね」

そんなことがあつて、新しく私たちの家族になった女の子の名前は「舞」と名付けることにしたのだった。

舞を生んでから一ヶ月くらい経ったときのこと。私の家のインターホンが鳴った。

「どちら様ですか？」

「清水透の父の達也です。田原海斗さんのことなんですが……」

インターホン越しに達也さんを見ると、明らかに様子がおかしかった。

「はい、今行きまーす」

と、返事をした私は緊迫した様子の達也さんに疑問を持ちながら玄関を出た。

「今日はどうしました？」

「あの……海斗さんのことなのですが……」

「夫がどうかしましたか？」

達也はうつむいてさつきから黙っている。

「あの、どうしたのですか？」

すると達也ははつとして

「いえ、申し訳ございません。海斗さんの悲報をお伝えに来ました」

「え？　悲報？」

「はい。実はついさっきまで救助者を助けるためにご一緒していたのですが、急に倒れられて、今、意識不明の

重体です。もしかすると、救助者を助けるために頑張りすぎたのかもしれませんが……」

胸がきゆうと苦しくなった。

「海斗のところまで、案内してもらえますか」

私は舞と達也さんの運転する車に乗って海斗のいる病院まで連れて行ってもらった。病室には目を瞑っている海斗の姿があつた。

「海斗！」

ちようどそこに居合わせた看護婦さんから事情を聞いた。過度な肉体労働と栄養失調が原因なんだそう。そして、数時間後、海斗は目を覚ますことがなくなってしまった。私は最愛の夫をなくし、一人になってしまったことを嘆いていた。いや、嘆くなんてものじゃない。もう、私は生きていてもなんの幸せをつかめないのじゃないかつて思つて……。でも、そんなとき私を励ましてくれたのは舞。私には舞がいる。そのことを気づかせてくれた。舞がいてくれたから今の私がいる。そう感じられた。

「ちなみにね、東灘区の被害は神戸の中で一番大きくて阪神高速が倒壊したり元の形がわからないぐらい家が潰れてしまつたりしていたの」

母は日記を閉じると同時に話し終えた。私は泣きそうになりながらも今から初詣に行くので気を取り直して、

「そうだったんだ、お母さん、バスが来たよ。早く乗ろう」

と言った。神社についた私たちはお参りをした。帰りのバスの中で、

「舞、何をお願いしたの？」

「お母さんには言わなーい」

「えー、教えてくれた方がいいじゃない」

「嫌なものは嫌なの！」

だって、「お母さんはずっと一緒にいたい。そして、お母さんを悲しませたくない」ってお願いしたのだから…

…。

中学三年生の初詣の日、私は家に帰ってまっしぐらにベッドに向かい、声を上げて泣いた。誰かのために泣いたのは初めてだった。

あれから数年後の今。私はかつてお兄ちゃんが目指した大学の医学部を受験をして、なんとか合格した。今は先輩医師の技術、知識を研修医として学んでいる。私はいつか、産婦人科医になりたいと思っている。お兄ちゃんが繋いでくれた、私の命で。もちろん、お兄ちゃんのノートとシャーペンも一緒に。

私はすべてを話し終えた。

「舞さんにはそんなことがあったのですね。」

「はい、そうなんです。それから私の母はこのことを後世の人たちに伝えるべく、『1117の被害』を書いたというわけですね」

「舞さんのお母さんが経験されたこと、僕とすごく似ていますよ。実は僕も双子の弟を阪神淡路大震災で亡くしたのです」

「あの、そこで少し気にかかることがあるのですが」

「気にかかること？」

私は透さんのきれいな目を見て話した。

「初めて透さんにお会いしたときから思っていたことなのですが、私が幼少期に会っている中学生の透くんと話す雰囲気似ているんです。いえ、似すぎています。それに透くんも双子の弟がいたのです。もしかしてですが、……透くん？」

すると、透はフツと笑った。

「やつと、気づいたんだね。そう、僕はあの透だよ。実はね、舞ちゃんのお兄ちゃんとお父さんが僕に頼んでたんだ。もし、自分が死んだら、お腹の子とお母さんとずっと一緒にいてほしいってね」

私は嬉しくてつい照れ笑いをしてしまった。

数年後。

「透、行くよ」

「わかつた、今行く」

私は透と一緒にそれぞれの勤め先の病院に行こうとしている。実はあれからお互い医者ということもあり、意気投合して私は透と結婚をした。また、私は無事に研修医を卒業、今は産婦人科医として必死に働いている。車に乗って、先についた病院で私は降りて透に別れを告げ、清水産婦人科医院というチャネル文字を見ながら病院の中へと足を進める。さあ、今度は私たちが命を繋ぐ番だ。私は自分のお腹を優しく擦りながら、強くそう思った。

東灘区の被害

死者	一四六九人
負傷者	三三八三人
全壊	一三六八七棟
半壊	五五三八棟



震災そして復興、9つの人と人との物語・灘区

手紙

中西祐月

雪が降り積もる季節。彼女はそこに花束をさすけた。もういない大切な人たちへ敬愛の意を込めて。

「教授は結婚しているのですか？」

一月十四日。次の日からセンター試験であるすみれは教授と呼ばれる先生に空港でそう聞いた。

「おや、どうしたんだいい？」 急にそんなことを聞くなんてえ、おどろきだねえ。明日くらいにミーちゃんの仲間たちが降ってくるんじゃない？」

ミーちゃんとは、理科室にある人骨の模型だ。ミイラからとったものらしい。教授は自分の片耳だけにつけている桜のピアスを弄びながらすみれに渾身のギャグを放った。

「そんなにガイコツが降ってきたら子供が失神しますよ」

すみれは教授のボケを冷たくあしらいながら答えた。

「教授つて、なんかお父さんみたいだなつて。教授は私の事情知ってますよね。長野県西部地震の時に母と姉が亡くなつて……。母と姉の記憶はあるんですけど、父は私が生まれる前に死んでしまつて。教授は私のお父さんみたいだなーつて。第一印象は最悪でしたが、一人でいた私に何度も声をかけてくれて嬉しかったんです。ああ、もう！ 恥ずかしいこと言わせないで下さい。ホント」

すみれは顔を赤らめながら呟くように言つた。教授は目を丸くし、

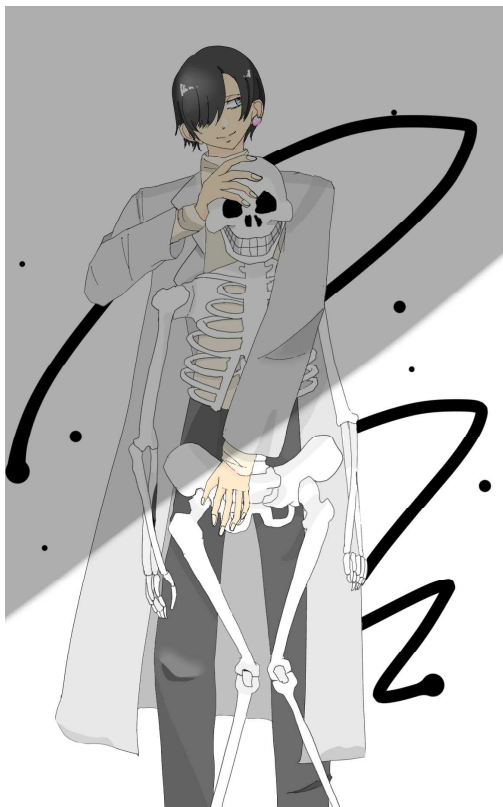
「……っ!! 本当に明日くらい

にミーちゃんでも降つてくるんじゃないかな……」

と弱々しく言葉を放つた。

「ありがと」

すみれは教授の反応に驚き、どう反応していいのかわからなくなつた。気まずい時間が流れる。この沈黙を破つたのは意外にも教授だつた。



「そういえば、僕が結婚してるかどうか聞きたかったんだよねえ。いないよ。奥さんも子供もいないよ。死んだんだ。まあ、結婚してたわけじゃないけど、結婚を約束してた人がいたんだけど地震でぼっくりね……。人の命ってこんなに儚いんだって天を恨んだよ……。なんか、ごめんねえ。重い話でええだけとね、君が僕のことをお父さんみたいって言うてくれるように、僕にとって君は娘のようなんだ。本当にこの学校に来てくれてありがとう」

教授は微笑みながら、前髪をかきあげた。その顔は驚くほど美しかった。肌は白く、ブルーとブラウンが混ざったような綺麗な目で、異様な雰囲気 が漂っていた。すみれは見とれてしまい、思わず

「綺麗な目……」

と呟いてしまった。しまったと思い、すみれは目をつぶった。しかし、教授からかけられた言葉は予想とは違っていたのだ。

「君もだよ。さ……」

今まで聞いたこともないような、優しく切ない声で誰かの名前を呼んだ。聞き取りづらく、肝心な名前は聞き取れなかった。すみれにとつてはいつもニマニマ笑ってばかりの教授にこんな切なく、寂しそうで、かつ優しいような表情ができることが意外だった。あまりにも驚きすぎて、開いた口が塞がらない。

「いやあ、ごめんねえ。変な空気にしちゃつてえ。さあ、もう東京に行く時間でしょ。急げ急げえ」教授は自分の口調が変わっていたことに気づいたようで、慌てて元の口調に戻し自分の思考を遮るように

言葉を放つて、教授はすみれの背を押した。すみれは教授が放った、さ……さんという人のことを詳しく聞くとした。が、お迎えにきた教授の二番弟子であるちはやさんが教授を連れて行くとする。

「教授！　こんなところにいらしたのですか！！　すみれさんが大事なのはわかりますが、早く来てください！！　怒られるの僕なんですから」

「やっぱり、僕も行っちゃだめえ？」

教授が駄々をこね始めた。ちはやさんはやっぱりか……というような顔をし、ため息をつき、教授を睨んだ。

「大体、貴方がずつと会合を放り出すのが悪いんだろーが。貴方の代わりに俺が何度上に怒られて、立場がなかったか！！　そもそも、貴方がすみれさんの出願票に間違つてすみれさんが昔住んでいた住所を書いてなければ、こんなことにはならなかったはずだ。それに貴方がサボらなければ、すみれさんに付いていけたらう！！　自業自得だ。反省してください。さあ、行きますよ」

いつもは丁寧な口調のちはやさんが、珍しく声を荒げたので、教授は萎縮し、

「ああ……ごめんねえ」

と謝った。

「もう、行きますよ！！」

そう言いながら、ちはやさんは教授を連れて行く。教授は半泣きで、すみれにじゃあねと言い、ちはやさんの

後ろをトボトボ歩く。さすがにすみれは教授をかわいそうに思い、教授に、

「必ずいい結果をとるので、そのときは笑顔で迎えてください!! 約束ですよ」

と精一杯叫びながら手を振った。トボトボ歩いていた教授は「マー」と笑い、

「待つてるよぉ、頑張つておいでえー」

と笑顔で手を振り返した。ちはやさんは少し申し訳なさそうにすみれに会釈をすると、二人は去った。

結局、さ……さんの謎は聞けずじまいだったな……。すみれは飛行機内でそう思い、帰ってきてから教授に聞いてみようと思った。

一月十七日

教授は徹夜明けで学校にいた。

「あー眠い眠い。まったく上も早く戻つてこい戻つてこいつて、うるさいなあ。約束は守つてよね。ほんとぉーに」

ぶつぶつ独り言を呟きながら家に帰る身支度をしていたその時だった。

視界が揺れ、立っているのもままならぬくらいの揺れだ。

「なに……。地震!!」

咄嗟に状況を理解した教授は素早く机の下に潜り込み、揺れが収まるのを待った。

その時間はとてもつらく、何十時間にも感じた。教授は揺れるたびにある人のことが頭に浮かんた。そのたびに教授は涙を堪える。

揺れが収まると、教授はため息をついた。

「危ないねえ、ほんと。地震つて、最悪だよ……。すみれちゃん、大丈夫かな」

また独り言を呟き、救助が来るのを待とうか迷ったが、周りの状況も確認したかったため、自ら行動することにした。まずは、現在いる階は二階なので、下に降りようとした。しかし、その必要はなかった。地震の影響で一階が潰れ、二階が一階になっていたから。教授が二階にいたのは不幸中の幸いだったかもしれない。

「もし、一階にいたら、死んでたねえ。いやあ、怖いねえ」

そう言いながら、外に出た。教授は驚いた。ビルは潰れ、電車は真つ二つに折れ、向こうの空は火で真つ赤に燃え上がっていたから。

「うわあ、これは、長野県西部地震より酷いんじゃないか……」

地震にトラウマがあるであろうすみれのが心配になった教授は、すみれに電話をかけようとした。その瞬間、教授の頭の上に柱が落ちてきて、教授は気絶した。

寝ていると大きな揺れを感じ、すみれは飛び起きた。

「何!! 地震?」

すぐさま、頭に浮かんだのは教授だった。もし、神戸市灘区が震源地なら……震源地じゃなくても揺れが強かったら……。

そう思うとすみれは不安で不安で仕方なかった。すぐに教授に連絡を取ろうとしたが、繋がらない。それなら……とテレビをつけて、状況を確認しようとした。放送局の方も混乱しているようで、中々状況が理解できなかった。

すると、

「たつた今、情報が入ってきました。神戸市で震度6が観測されたようです。しかし、被害は少ない模様です」

と男性アナウンサーが早口で喋った。

東京でも、揺れがあつたのに、神戸が大丈夫な訳ないでしょ。誤報だと思い、教授に電話をかけた。教授は全然電話に出ず、何度も何度も受話器を持ち続けた。電話に出ない度に心配が募った。いらだちとともに、電話を投げ捨てようとした瞬間、教授が電話に出た。

「もしもし、教授!! しつかりしてください!! 教授!!」

「ごめんな……すみれ」

教授は確かにそう言った。だが、その言葉を呟いたきり、教授は一言も喋らない。

「どういことですか? 教授。返事をしてください。お願いします。教授!! 教授!!」

すみれは教授に何度も呼びかけた。だが、やはり返事はない。その度に母と姉を思い浮かべた。もし、教授が母と姉のように死んでしまったらどうしよう……そう思うと胸が張り裂けそうになり、涙が止まらなかった。

「男性発見」

不意に受話器から教授ではない男性の声が聞こえてきた。どうやらレスキューのようだ。すみれは教授が助かると思い、安堵した。しかし、その後続く言葉は想像とは違った。

「瀕死の状況です。もう、助からないかと……」

「え……？」

電話から聞こえたレスキューの声を聞き、すみれは状況が飲み込めなかった。え……教授が……死んだ。そんな、ありえない。ありえないよね。教授……。

「ああああああああああああああ」

すみれは泣きながら叫び、そして気を失った。

「すみれさん!! すみれさん!! 大丈夫ですか? すみれさん!!」

気づいたそこは病院の中だった。横にはちはやさんがいた。

そうか……あれは、夢だったんだ。教授は今も元気に生きている。きっとそうだ。すみれは教授に会いたくな
った。

「ハハハ。ごめんなさい。教授はどこですか？ 私、つい、先刻まで、教授が死んでしまう夢を見ていて……。早く会いたいんです。教授はどこですか？」

すみれはベッドから立ち上がり、病室を出ようとした。しかし、なぜか足がもたついて上手く歩けず、倒れそうになった。ちはやさんはあわてて彼女を受け止め、ベッドに戻した。

「落ち着いて、私の話を聞いてください。すみれさん」

「教授に!! 教授に会わせてください。そこにいます。教授」

「教授は……お亡くなりになりました」

ちはやさんは悔しそうに声を震わせながらそう告げた。すみれは言葉が出てこなかった。

「地震で落ちてきた柱が何かで頭を打ち、レスキューの方たちが見つけたときには……もう」

ちはやさんは唇を噛み締めながら、まるで自分のせいと言わんばかりに……。

「そんな……どうして……嘘でしょ」

すみれには彼女に向かって笑ってくれた無邪気な笑顔とか、時々フツと見せる悲しそうな表情とか、生徒に向かつて真剣に怒る表情とか全部全部もう見られなくなることが信じられなかった。今でも耳の奥であの変な口調で喋りかけられているようで……。

「そんなわけないでしょう!! 私は教授と、約束したんです。だから……だから、きつと帰ってきます!! そうです。きつと……死んだなんて」

すみれは目を見開き、自分の手で顔を覆っていた。すみれの心はもうはち切れそうで、彼女はそれを必死に耐えていた。

「本当に、貴方は、博士そっくりですね……」

そう、寂しそうに笑い、すみれの頭を撫でた。その手は教授のように温かく、彼女の目からは涙が溢れてきた。

「これは、もしすみれさんが成人するまでに自分に何かあつたら貴方に渡すように教授に頼まれていたものです。どうぞ」

ちはやさんは一通の手紙と小さな白い箱、そして白衣をすみれに渡し、その場から去っていった。すみれは涙で視界が霞む中手紙の封を切り、読み始めた。

すみれちゃんへ

こんにちば。これを君が読んでいるということは、もう僕は死んでいるのかな？　さすがに文面上はあんな変な喋り方はしないから安心してね。さて、なぜこんな手紙を書いているのか。これは僕の秘密と懺悔を話すための手紙だ。

まずは僕の生い立ちを聞いてくれるかな？　僕は東北の田舎の隅の方にある町で生まれたんだ。君は気

づいていただろうか、日本人離れした僕の目の色に、父と母はたく落ち込んでしまつてね。僕が三歳のときに、僕を岐阜にいる叔父さんに預けてしまつたんだ。叔父さんは一人暮らしで、僕をとてかわいがってくれたよ。お前はいい子だねと。だけど、一度も容姿については触れてくれなかった。そんな叔父に僕は嫌気が差したのかな。反抗期も相まつて、高校一年生のときに家を出たんだ。叔父はとても心配して、僕を探したみたい。何日も何日も。僕もそろそろいいかなと思つて叔父さんの家に帰ろうとした。叔父さんの家が見えてきて、道路を挟んで向こうのところまで来た。叔父さんは玄関まで出てきていた。僕は叔父さんと叫んだ。叔父さんも僕の名前を叫んで道路を渡ろうとした。けど、渡り切ることはなかった。トラックに轢かれてしまつたんだ。僕の目の前で……。本当は渡りきれずだつたんだ。だけど僕を探していたせいで、叔父さんは口々に寝てなかつたらしい。渡つている最中に倒れてしまつたんだ。だから、轢かれた。全部僕のせいだ。僕が悪い。そう思つて、自分を責めた。元はと言えば、この目。僕はこの不吉な目をできるだけ人に見せないように、前髪を伸ばし始め、俯くようになった。そして、無我夢中で勉強した。何も考えられなくなるくらい、死にものぐるいで。その甲斐もあつて、大学にも合格できた。そこで出会つたのが、君のお母さん、桜さんだ。桜さんは准教授をされており、男尊女卑の傾向がまだ残つていた時代にすごいと思つた。話しかけてみたいと思つた。だけど、桜さんの周りにはいつもたくさんの人がいて、僕なんかが近づけるようなときはなかった。そんなある日だ。他の教授に荷物運びを頼まれて、資料を運んでいたときのこと、桜さんどづつかつてしまつたんだ。桜さんは「ごめんねえ」と言いながら、資料を拾うのを手伝つてくれた。僕は申し訳なくなり、俯いてしまつた。すると、桜さんは「俯いたつていい

ことはないわよ。常に明るく上を見ないと。人生楽しくないよ。君からは人生不幸ですオーラが出まくってるわよ。前髪のせいかしら？　いつそのこと上げたらいいのに……」と言ひ、僕の前髪をかきあげた。僕は目を見られると思い、桜さんに気持ち悪いなんて言われたらどうしよう……と一人不安な気持ちでいた。すると、桜さんは僕の目を綺麗だと言ってくれたんだ。僕はそのとき、初めて誰かに認めてもらえたような気がした。それと同時に僕は彼女のことを好きになつたんだ。それが僕と桜さんの出会いだつた。その後、桜さんに言われた通り、前髪を切つてみた。僕の目も最初は気味悪がられたけど、みんなだんだん慣れていつて、友達も増えていつた。なによりも目のおかげで桜さんと話す機会も増え、しばらくすると一緒に時を過ごすようになっていた。もちろん周りには内緒でね。だつて十四も年が離れていたし、准教授と学生という立場の違いもあったしね。

桜さんには二人の子供がいた。下の子はまだ一歳で妊娠が判明したその日に旦那さんが事故で死んだらしい。僕は子供たちに会つてみた。姉である桃ちゃんは九歳なのにしつかりして、僕なんかよりもずと家事をこなしていた。すみれちゃんは、ただひたすらにかわいかつた。僕に向かつてはにやにやで、「あーあ、あーあ」ってハイハイしながら言つてくれたんだ。二人とも僕のことを気に入つてくれたみたいでとてもうれしかつた。僕はなぜ彼女が准教授をしているのか疑問に思つた。彼女ほどの人物であれば、他の道もたくさんあつただろうから。僕は彼女になぜ准教授になろうとしたのかを尋ねた。いきなりそんなことを聞くから桜さんは一瞬キョトンとしていたが、寂しそうに笑いながら答えた。

「私、孤児だったの。私の父は戦争で死んで、母は私が四歳のとき、戦争で逃げ回った疲労で風邪が悪化し、死んだの。そんな私を引き取ってくれたのが大学の准教授の方だった。私の父と仲がよかつたらしく、自分の身に何かあつたら娘を引き取ってくれと父がお願いしていたみたいで……。その日から彼は私の父になつてくれて、一緒に暮らし始めたの。父はとても優しく、私にたくさん大学の話をしてくれた。いつかは教授になつてという夢とともに。その顔はとても輝いていて……。私は父のことが大好きだったの。だけど、死別した旦那との結婚は反対された。そりゃあ、私はまだ高校一年生だったし、旦那とも年齢も結構離れてたし、普通の親なら反対するよね。だけど、バカな私は頭に血がのぼつて、父に大嫌い!! つて言つてしまったの。で、そのまま駆け落ち……。本当にあのときの自分ほど愚かな人はいないと思うわ。父は懸命に探し回ってくれたの。だけど、結局父は私を見つけられず、絶望した父は、そのまま、自殺してしまったの。父の遺書には、

今でもやはり桜を許さない。許さないけど、最高の娘だった。こんな俺と過ごした日々は……。楽しかったか? 俺との日々は忘れてもいいけど、俺がお前を愛していたことは忘れないでほしい。桜、俺の娘になつてくれてありがとう。不甲斐ない父親でごめん。愛してる。

と書かれていたわ。今でも過去に戻るなら、謝りたい。私の方こそ不甲斐ない娘でごめんね。本当は大好きだよ。大嫌いななんて、嘘だから、戻ってきてつて謝りたかった。けど、もう父は戻つてこない。だから、私は父と同じ道を選んでる。私が教授になるの。それがせめてもの罪滅ばし。贖罪のためかな……。私だつて本当は違う職に就きたいと思つたこともあつたわ。でも、私の頭の中ではそれだけは許さないっていう声をするの。私は教

授になりたいという父の願望に縛られているの。だから、私は絶対にこの仕事を辞めない。そりゃあ、さあ、准教授はそこまで年収は高くないから、貯金もないし、旦那が残してくれたお金も使うわけにはいかないわ。このお金はあの子たちのためにも取っておきたいから。だから、有休を取るわけにはいかない。本当は、ちよつとゆつくりして、すみれと桃と一緒に過ごしたいんだけど……。育てるつて決めた以上、育てる。私は決めたことはきつちりやり通す主義だからね。君と私は似たもの同士だね。両親を失い、育ての親も亡くして、似たもの同士は惹かれるつてわけだね」

そう言つて笑つた桜さんの表情は迷いがないように見えた。だけど、その心の裏はどうだったのか、それは僕にはわからない。だけど、できるだけ早く僕もお金を稼いで桜さんを楽にさせたい。そして、彼女たちの笑顔を守りたい。そう思つた。だから、もつともつと勉強した。

そして、博士課程の修了が近づいたころ、アメリカの大学に来ないかと誘いがあつた。僕にとつては魅力的な話だつたけど、桜さんを置いていくわけにはいかないので、断ろうとした。だけど、桜さんが、いい機会だから行つておいで。私たちは大丈夫だからと言つて笑つた。僕はせめて、これを、と桜のピアスを片方を渡した。桃ちゃんには桃の花があしらわれたブレスレットを、すみれちゃんにはすみれの花をイメージした時計をプレゼントした。これを持つている限り、僕たちは家族だと言つて、もう片方のピアスを自分の耳につけた。桜さんはこんなによく見つけたね、と言いながら、ピアスを片耳につけた。どう？ 似合つてる？ そう言いながら僕に笑顔を見せた彼女はかわいかつた。僕は、「大学教授になつて桜さんたちを迎えにきます。そのときは、呪縛から解

かれて好きな職に就いてください。でも、やっぱり君も教授になつてゐるんだろぅなあ」と桜さんに僕は言つた。桜さんは何も喋らなくなつた。僕は心配になつて、さすがに出しやばりすぎたかなと思ひ、彼女の顔を覗き込んだ。桜さんは泣いていた。「私のことをこんなにも氣にかけてくれて、重荷を背負ってくれるのは君くらいだよ。ありがとう」と嗚咽混じりにグシャグシャの顔で微笑みながら桜さんは言つた。僕は早く教授になつて、桜さんを迎えに行こうと決意し、渡米した。

研究はスムーズに進み、あと一年というときに事件が起こつた。長野県西部地震。最初は全然氣にも止めておらず、日本で地震が起こつたんだ程度にしか思つていなかった。しかし、地震発生から十日後に大学の方から、桜さんと桃ちゃんが遺体で発見されたので、すみれちゃんを保護してほしいという連絡がきたんだ。地震が起きたその日は、すみれちゃんは小学校の合宿だつたので二人で長野県に温泉に出掛けていたみたいだつた。あと、一年だつたのに!! 一年経つたらこうちで一緒に過ごせたのに……。僕は直ぐに帰国し、桜さんに会いに行つた。桜さんは笑つていた。そして、その耳には桜のヒアスが……。僕はなぜ、アメリカになど渡つてしまつたのだらうかと後悔した。深く深く後悔した。「嘘だろ。桜……。お前、教授になるんじゃないのか!! お前は生きたいといけないう。桃も何か言つてくれよ。なあ。僕が悪かつたから。謝るから……。だから昔のように笑つてくれよ。桜、桃、俺はどうすればいいんだよ……。こんな僕と家族になんかなつてくれないよな……。ごめんな」と僕は呟き、嘆いた。最後に桜のヒアスを取ろうとした。けど、できなかった。何かと理由をつけ、結局は桜や桃を裏切つた僕に彼女たちの家族でいようなんて、虫が良すぎると思つたから。でも、それでも、こんな僕で

も愛してくれて、家族になつてほしいと言う桜と桃、すみれちゃんと家族でいたいと思つてしまつたから。こんな僕でも家族でいたいと思つたから。僕は彼女の白衣だけを預かり、すみれちゃんを保護しに行こうとした。だけど、できなかった。今、僕がすみれちゃんに会つたら、すみれちゃんに罵られるんじゃないかな……そう考えたから。お母さんを捨ててなんで外国なんかに行つたの。大嫌いつて……。それが怖かつた。そもそも、すみれちゃんと最後に会つたのはすみれちゃんがまだ小さかつた頃の話だ。僕はすみれちゃんにも嫌われたらもう生きられる気がしない。そう思つた。だから、もう少し、月日が経つてからにしよう。今、預かつても、きつとすみれちゃんを幸せにできない。だからせめて、あと一年。あと一年待つてくれ。無事大学教授になれば必ず君を迎えに行くから。そう自分に言い聞かせ、大学の方には、すみれちゃんを施設に預けてくださいと伝えた。本当に勝手だよ。僕は自分に適当な理由を付けて、またすみれちゃんを捨てたんだ。そもそもすみれちゃんはまだ小学低学年なのに、僕を責めたりするはずがないのに、そんなことを考える余裕もなかつた。今でも、あのときのことは後悔している。意気地のない僕は、そのまま米国に戻つた。それから一年後僕は無事に大学教授になった。大学教授になれたその日に日本に帰国し、すみれちゃんを保護するために施設に向かつた。だけど、すみれちゃんはいなかつた。違う施設に移されたみたいだつた。本当は東京で預かつてもらうはずだつたが、手違いで西日本の施設になつてしまつたらしく、その施設の人も行方がわからないらしかつた。僕はあのとき……と何度も後悔して、答えを求めるために桜が住んでいた部屋に戻ることにした。管理人さんに無茶を言い、そのままの状態にしていほしいと頼んであつたから、久しぶりに入るその部屋はあまり変わつていなかった。柱に

刻まれているメモリが増えたことぐらいかな、変わっていたのは。すみれもスクスク育っているみたいだ。そう思い、僕は適当に棚の中を見たりした。その中の一つに一通の手紙が入っていた。僕はなんだろうと思い、手紙を見た。そこには桜の手紙があつた。一人で二人の子供を育てている不安がそれを書かせたのだと思う。いろんなことが綴られていた。

何でだろう。何かを書いておかないとて思う。

すみれ!! 私の子供。すみれは実の父親をまったく知らないよね。私は彼が死んだと知ったときに、すみれをどうしようか迷ってしまったんです。中絶しようかと。だけど、そうはしませんでした。なんでだと思ふ? やっぱ子供はどうしようもなくかわいいんだよ。まだ生まれてないけど、私の子供だもの。かわいいに決まってるでしょう!! 何よりも自分の子供を殺すという判断が私にはできませんでした。私はすみれを産んだことは、もちろん後悔してません!! 誰がなんと言おうと後悔なんかするものか。逆にこんなかわいい娘を与えてくれたことを感謝しなくちゃ。すみれ、大好きだよ。私の娘になつてくれてありがとう。

桃!! 桃を産んだとき、私は二十五歳でした。最初、子供ができたとき嬉しくて、ポロポロ涙をこぼしていました。だけど、だんだんよぎってくるのは期待ではなく、不安。本当に大丈夫かな? 私に産めるのかな? 何度も悩みました。だけど、産んでみたらびつくり。そんな不安も痛みも消え失せるほどかわいい赤ちゃんと会えたから。私はこの子を特別かわいがつてあげようと思いました。だけど桃には本当

に苦勞をかけたね。私が仕事であまり家にいないので、かまつてあげることもできず、家事も任せていたよ。ね。あまり、かわいがつてあげられませんでした。本当にごめんね。だけど、私が職務を全うできたのは桃のおかげ。桃には『家を支えてくれてありがとう賞』を授けたいと思います!! 名誉ある賞なんだからね、受け取つてよ!! 桃、大好きだよ。ありがとう!!

そして、最後に私の未来の旦那さん。最初会つたときのこと覚えてる? 君、とっても綺麗な目だつたから思わず見とれちゃつたんだ。私は君のことが好きになつたんだよね。それからの日々は楽しかつた。日々の疲れも吹つ飛ぶくらい!! こんな日々がずっと続けばいいと思つた。だけど、君はアメリカに行つちやつた……。君の前では元氣な姿でいたかつたから、意地を張り続けたけど、本当は行つてほしくなかつたなあ。なんか絆が切れちゃいそう。一緒にいたかつた。だけど、私のわがままで君をここに留まらせるわけにはいかない。君はもつと羽ばたける。私が言うんだから、間違いないよ! だからあのとき、見送つた。けどね、君が桜のピアスをくれたから。これを付けてる限り、君ともすみれとも桃とも繋がつていられる。だからね。不安もちよつと薄らいだんだ。君には本当に感謝してる。ありがとう。ありがとう。私たちと家族になつてくれてありがとう!! 私を好きになつてくれてありがとう。私たち家族とともに生きてくれてありがとう。私を選んでくれてありがとう。ずっと君のことが大好きだよ。

P.S.

私の夢は、君と一緒に研究することだったんだよ。叶うかな？ 叶うといいな。

もしも私に何かあつたら、なんて不吉なことを言うものじゃないけど（笑）。ただの独り言。すみれと桃をよろしく。

僕はこの手紙を読んで号泣した。僕の方こそこんな醜い僕を愛してくれてありがとう。大好きだよ桜。そう伝えたいけど、もう伝えられない。結局僕から君に何もしてあげられなかつたじゃないか。君は僕に温もりを与えてくれた。笑顔を与えてくれた。喜びも与えてくれた。なのに、僕は……。だから、すみれちゃんを守つていこうと思つた。陰からそつと。そして、すみれちゃんが一人前の大人になつたら、謝ろう。全部打ち明けよう。そして、もし叶うのなら僕が一番弟子になつてもらおう、そう思つて一番弟子の座は空けておいた。髪もすみれちゃんが僕に会つて、僕の罪を許すまで、伸ばし続けよう。これは一種の賭けだから。そして、ずっと笑うようになった。笑わないと後悔の念に押しつぶされそうになつて、泣きたくなるから。僕はすみれちゃんがどの施設にいるか必死に調べた。そして、ようやく神戸市灘区にすることがわかつた。僕は、アメリカの大学にこんな手紙を送りつけた。

僕は今、重大な研究結果を持っています。これを貴大学に捧げる代わりに、私の要件をのんでください。一つ、今から私は三年の猶予をください。また、そのことについては触れないでください。

一つ、私を日本にある女子高校の先生にしてください。手段は問いません。

一つ、もし私の娘が貴大学に入りたいと言ったら入れてあげてください。

以上です。

脅迫めいたことだとわかつてはいたけど、すみれちゃんのためなら構わなかった。そして、すみれちゃんのいる施設に手紙を出し、その女子高校に強制的に通わせた。こんな強引な真似、君は嫌うかもしれないけど、君が笑顔を取り戻すためなら、僕は何でもしたい思いだった。それくらい君には笑ってほしいんだ。君は僕の光だから。大好きだよ。すみれちゃん。本当ならば、僕の子供になつてほしかった。

鈴木時雨

灘区の被害

死者	九三三人
負傷者	一一一二人
全壊	一二七五七棟
半壊	五六七五棟

震災そして復興、9つの人と人との物語・北区
がんばるINKITA KOBE 中嶋天舵

その女の子は、家の玄関を開け、木下病院へ向かった。

「お見舞いに来ました。一一七号室に行きたいんですけど」
受付の女性に言う。

「一一七号室の……水谷直人さんの部屋ですね。面会時間は午後八時までです」

「わかりました」

女の子はそう言うのと走って一一七号室へ向かった。

「また地震や。最近多いなー」

その少女は雨が降る中、傘を差して歩いていた。すると、突然大きな音がした。心配になり、慌てて近寄って

みた。

「うわっ……」

そこでは一台の車が電柱にぶつかって煙を上げていた。運転席ではエアバッグが作動していたらしく、中にいた男の人は気絶しているようだった。救急車を呼んだが、十五分はかかるらしい。名前はわかるかなどと聞かれたので、その人のポケットの財布の中にあつた免許証を見た。

「えつと、水谷直人さんです！」

少女はそう伝える。

「わかりました。水谷直人さんですね、すぐに向かいます」

ん？ この名前、どこかで……。

「あ、そんな場合ちやう！ 心臓は……動いてる、か。じゃあ……」

そうこうしているうちに救急車が到着し、男は搬送されていった。あまりにもスムーズな搬送だったので、少女は救急救命士の人に声をかけられるまで動けなかった。

「あの、救急の者なんですけど、あなたの名前と年齢は？」

「あ、谷崎里香、十八歳です」

「わかりました。ありがとうございます」

そう言うと救急の人はせわしなく走っていった。

「直人…なわ…」

ある日の夕方、目を覚ました男は自分がベッドの上にいることに気づいた。

「ここは、どこや？　確か、車を、運転してて……なんか夢見てたような気が」
頭が痛い。思うように体を動かせない。

「あ、藤井さん、また本を読んでるんですか？」

隣で女の人の声でしたので少しずつ振り返ってみたら、ベッドの上に男の人が座っていた。さっきの声は看護師さんみえた。

「見ればわかるでしょ」

藤井さんと呼ばれていた人は、そつけない態度で答えるが、看護師さんは嫌な顔一つせず笑顔で向き合っていた。すると、藤井さんは僕が起きたことに気づいたらしく、

「あ、隣の人起きてますよ。あなた、周りをちゃんと見ないと」

「ほんとだ！　あなた、二日も寝てたんですよ！　えつと、ちよつと待つてくださいね」

そう言うと、看護師さんは走って部屋から出ていった。

「あの看護師、どうかと思いませんか？」

隣で藤井さんが言う。

「そうですか？　明るくていい人だと思いますけど」

「そうですか」

藤井さんはそう言うと、読書を再開した。

藤井さんは、几帳面で、いかにも勉強ができる優等生のようだ。すると突然ドアが開いたので振り向くと、さっきの看護師さんが赤い袋を持って入ってきた。それを僕に渡すと、

「下で大学生くらの女の子があなたに渡してつて。中を見たけど別に危険なものではなさそうだからここに置いておきますね。あと、あなたの知り合いの方が来ていますよ」

「あ、ありがとうございます。僕の知り合い？」

僕の家族は僕が六歳のときに死んでしまった。あのときは今でも鮮明に覚えている。それから母方のじいちゃんに育ててもらった。じいちゃんが死んでしまったときからはずっと一人で生きてきた。

「おつすです、先輩！　元気ですかあ？」

声がした方を振りみると、会社の後輩の清水がいた。そういえばこいつがいたからずっと一人というわけでもなかった。こいつとだけはなぜか話せる。そういえば、じいちゃんが死んでしまう数日前にもずっと誰かと話していたな、ふとそんなことを思い出した。

「お前か……」

「お前か、とはなんすか！ わざわざ先輩のために来てあげたんすよ」

「お前な、もうちよつとは先輩を敬えるようになれんか」

「先輩が弱つちいのがいけないんですよ」

清水は、柔道の全国大会で二位を取った実力だ。だからといって力を見せびらかすわけでもなく、自分が普通だと思っている、逆にイラツと来るタイプだ。

「お前が強いだけだ」

「まあ、先輩よりは強いすけど……。じゃ、帰りますね。これでも食べといてください」
そう言つて差し出してきた青い袋の中には、立派なみかんが入っていた。

「お前、これ結構高級品だろ？ いいのか？」

「いえ、実家で獲れたものばかりです。それじゃあ」

そう言つと、少し早足で廊下に出ていった。清水の実家、農業やつてたんだな。

「あの……」

隣で本を読んでいた藤井さんがなにか言いたそうにしていた。

「どうかしたんですか？」

「いや、その袋の中、なんなのか気になつて」

「あ、この中はフルーツでした」

「いえ、赤い袋の方です。女子大生がくれたとかいう」

「あ。ほんとだ、忘れてました。どれどれ……ん？」

中を見てみると、新聞紙が一部入っていた。

「がんばろうKOBE……里香ちゃん？」

「あの人、大丈夫だったのかな？」

少女は男が搬送されてから、家に帰ってもずっとあの男の安否を考えていた。それよりも、どうして自分が「直人」という名前に引つかかっているのか気になっていた。家に帰って少ししたとき、お父さんに聞こう、と思った。メールを開いたが、なんとなく電話したくなつたので通話のボタンを押した。少し電子音が流れると、すぐにお母さんが電話に出た。

「里香、どうしたの？」

「あ、ちよつとお父さんに代わつてくれへん？」

「わかつた。けど、里香がお父さんに電話かけるなんて珍しいね」

「そう？」

お母さんがお父さんを呼ぶ声が聞こえた。それから二十秒も経たないうちにお父さんの声が聞こえた。

「どうした、里香？」

「あのさあ、今日家の近くで車が事故つて、私が救急車に電話かけてん」

「おお、そいつあすごいなあ。お前そんな行動力あつたんやな」

「いや、私もびつくりしてる。いきなり過ぎて、頭回らんかつたもん」

私は笑いながら話す。

「そーいや、お父さんの近所でも火事あつたんやろ？　大丈夫やつた？」

「ああ、近所つて言つても二百メートルくらい離れとるから、ここは何も問題ないで」

「よかつたあ。その家、火事で家の住人大怪我やつたらしいな。お父さんも気をつけてよ」

「ま、死ななかつただけマシやろ。タバコの火の不始末が原因らしいな。そういえば、俺に電話かけたの、なんぞなん？　事故の話だけやつたらお母さんでもよかつたやろ」

お父さんとの話に夢中になって、そのことを忘れていた。

「ああ、あのさあ、ちよつと事故のときに気になることがあつて。その事故つた人の名前が水谷直人つていうらしいねんけど、どつかで聞いたことあるなーつて思つてさ」

「水谷……直人さん、か。いや、全然知らへん……あ、ちよつとトイレいきたいしもう電話切るわ。またな」

「ちよつとまつ——」

お父さんは早口で言つと、電話を切つてしまった。

「そんなにトイレ行きたかつたのかな。ま、いつか。また今度聞こう。それより疲れたーつ。もう寝よ」

布団に行く元氣もなかったので、部屋の電気を消すと炬燵の中で目をつぶった。

逃げるようにトイレに駆け込むと、俺は長いため息をつく。水谷直人、それは里香が子供の頃に起きた阪神淡路大震災で、俺たちの家が崩れたときに助けてくれた人の名前だった。里香をかわいがってくれ、震災の直後で大変だった俺たちを安心させてくれた。なにより、里香も水谷さんといるときは笑顔を絶やさず、楽しそうにしていたことが嬉しかった。でもある日、ごめんなさいと書かれた手紙を残してどこかに行ってしまう。里香はショックで……

「水谷さんはどうしてあんなに可愛がつてくれていたのに、突然消えてしまったんやろ？」
俺はあのときの里香の泣き叫ぶ声を再び思い出し、一人トイレの中でうずくまっていた。

何分経っただろう。自分を呼ぶ妻の声が聞こえたので、トイレを出てみると、妻がテレビを凝視していた。

「どうした？」

「あなた、これ」

そう言われて妻の指すテレビの画面を見ると、見たことのある、いや、さっきからずっと考えていた人の顔が映っていた。

「水谷さんって、あの……」

妻はすぐに不安そうな顔をした。妻もあのときのことを思い出したのだろう。

「ああ、あのときの水谷さんだ。ちょうどよかったのかもな。里香に話すつもりはなかったんだけど」

俺はそう言うと、今日里香に聞いたことを、あますところなくすべて妻に伝えた。妻は徐々に顔を悪くしていき、「いつかは里香にも言わないといけないよね」と言った。そして、しばらくは秘密にしておこうとも言った。里香は、ショックで記憶が混乱してしまつたらしい。または、すべて忘れ果ててしまつたのか。それから一年も経たないうちに、気づけば水谷さんのことを忘れてしまつていた。俺たちはテレビを消すと、鼻水をすすりながら寝室へ向かった。

誰かに名前を呼ばれた気がして目を開けた。若い男の人の声だつた。

「……リカちゃん」

周りを見るが、真つ暗で何も見えない。ときどき女の子の押し殺した笑い声がする。

「誰？　ここはどこ」

「……リカちゃん、隠れるの上手だね。どこに隠れてたの？」

また私の名前を呼ばれた。聞き覚えのある声だつた。私はこの声の人を知っているはずだ。誰だつたわけ？

ここはどこなんだろう？　そんなことを考えていると、突然視界が明るくなった。

「ここだよー！」

女の子の元気な声がする。私はこの女の子と一緒に誰かの家のダンスの中に隠れていたようだ。

「そこにいたのか、気づかなかつたよ。ほんとにリカは隠れるのが上手だなあ」

なぜか、女の子と男の人の顔はぼやけていてわからなかつた。この女の子は私と同じ名前なのだろうか。しばらくすると男の人が「外に出て瓦礫の片付けに行こう」と言つた。男の人は女の子と一緒に外へ行つてしまつた。あの人たちには私が見えていないのだろうか？ 不思議に思いながら外へ出ると、私は啞然とした。周りには家の瓦礫が散乱していた。何十軒もの家が半壊していて、周りの人は皆暗い顔をしている。この女の子は笑顔だつた。周りが冷めた目で女の子を見る。女の子は瓦礫の片付けを男の人と一緒に笑顔でやつている。いくつもの冷めた目に気づいていないようだつた。何人かがため息をつき、ボソボソと話している。顔はわからなかつたが、男の人は悲しそうな顔をしていた。男の人は女の子の行動を止めようとはしなかつたが、この女の子と一緒にいるせいで男の人まで冷めた目で見られてしまつている。それが可哀想だと思つた。

「リカちゃん、ここの片付けが終わつたらお家に帰ろつか」

「うんっ！」

女の子は元気よく答えると、汗を流しながら道に溜まつた瓦礫を端に寄せていつた。私は疲れたので、少し目をつぶつた。

気づけば、外は暗くなつていて、またさっきの家に戻つていた。

「お兄ちゃん、今日の昼ごはん何？」

「今日はね、リカちゃんのお好きな梅おにぎりをたくさん作るね」

「やったあー！」

その女の子は、男の人のことをお兄ちゃんと呼んでいるんだ。家族なのかな？

「今日はリカちゃんのお父さんとお母さん遅くなるつて。僕はまた明日も来るよ」

「最近ずつと帰ってくるの遅いな。でも、お兄ちゃんが来てくれるから寂しくない！」

「偉いね。お父さんとお母さんもリカちゃんのために頑張っているからね。ふたりとも疲れているから休ませてあげようね」

「はい。お兄ちゃん、明日も来てくれるよね」

「うん、もちろん。リカちゃんは、僕にとつて大切な人だよ」

そう言うと、男の人はおにぎりがたくさん入ったお皿を机においた。二人がおにぎりを口に運んだ瞬間視界が真つ暗になった。

「なに、これ？」

そして、視界にはかすかに「ごめんなさい」と書かれた紙が映っていた。そして、女の子の泣き叫ぶ声が聞こえ、目が覚めた。

「なんだ、夢か……」

目が覚めると汗でシャツが濡れていることに気づいた。そういえば、炬燵の中で寝てしまったな。炬燵から出ると、シャッターを上げた。外がまだ暗かったので時計を見ると三時を指していた。さつき見た夢は何だったんやろ？ リカちゃんか……私も、阪神淡路大震災が起きたときはあれくらいの年齢だったんやろな。ま、ただの夢だし、気にする必要もないか。そう思い目をつづたが、なかなか眠ることができない。やつぱりさつきの夢が気になっているのだろうか。あの事故と夢が関係している気がしたが、それはありえないなとも思った。そう思いスマホを開き、ネットニュースを見るとさつきの事故の記事があつた。

「もう出てるんや。早いなあ」

そう思ったが、よく見ると具体的なことは書かれていなかったので、原因はまだわかっていないようだ。未だ意識不明と書かれていた。

「あの男の人結構重症だったのかな？ 目立った傷とかはなかったし、血も出てなかったけど……」

そして、もう一度、落ち着いてはじめてから記事を読んでみた。その「軽症」という文字に安心した。

「関係ない人とはいえ、私が助けた人のことは気になってしまふよな。ま、いつまでも気になってたつてしようがない。あの人は軽傷だったらしいし、多分大丈夫だろう。もう忘れよ」

そう考えたらさつきより少し気が楽になったのか、すぐに眠気が襲ってきた。

「お兄ちゃんどこ行っちゃったの？　ねえ、お兄ちゃんはどこなの。帰ってきてくれるよね。お兄ちゃんと約束したもん、帰ってきてくれるって……言った。パパもママもなんで何も言わないの」

またこの夢か。女の子の隣には、悲しそうな顔をした女の子のお父さんとお母さんがいる……え？　その顔を見た瞬間、思わず声が出てしまった。顔がはつきりと見えたからだ。そして、その顔は、

「なんでお父さんとお母さんがここにいるんや？　これは、夢やんな。この女の子は、だれ？　お父さんとお母さんで、この女の子は……私？　でもこれは夢。じゃあ、どういふこと？」

真つ白になった私の頭の中では、いつまでも女の子の泣き声が響いていた。目を覚ました私は、少し考えたあとスマホを取り出し、お父さんに電話した。

俺は家の電話が鳴っていることに気づき、目を開けた。

「誰からやろ？」

壁にかかっている時計を見ると、まだ七時だった。隣で寝ている妻を起こさないように起き上がると、昨日のことを思い出し、ため息をついて受話器を上げた。

そして、受話器を下ろすと十秒も経たないうちにまた電話がなった。今度は誰だ？

「はい、谷崎ですけど……」

「お父さん、私だよ。ちよつと聞きたいことがあるんだけどさ」

「何だ、また水谷さんの話か？」

「いや、今度は違うんだけど、私が子供の頃、あれは大きな地震があつたときかな？　誰かと一緒にいた気がするんだけど誰だつたか知らない？」

「え……思い出したの？　子供のころのこと」

「うん。なんか夢で見えてさ、顔はわからなかつたけど、男の人が私と一緒に遊んでくれていて、最後にはいなくなつちやつたんだけど」

「それは夢なんだろう」

「でも、さつきお父さんが『思い出したのか』って言つてたやん」

しまった。妻が起きてくる気配はない。今から呼びに行く、さらに里香に不審がられてしまう。どうしよう、言つちやつて大丈夫かな？

「お願い、教えてよ、何があつたのか」

「えつと……それは」

「自分を知つてショックで死んでしまつても、自分の聞きたいことを聞かずに人生を過ごすよりかは百倍まし。お願いやから、私が子供の頃に何があつたか教えて」

「……里香、お前が言っている男の人は、水谷さんやで」

「え？」

「お前が小さい頃に起きた地震で、家族全員が水谷さんに助けてもらったんや。それから、子供の里香のお世話をしてくれたんだけど、あるとき、手紙を残して消えてしまったんや。なんでかは俺にも知らせてくれないんだ。」

なぜ？

「それで、お前はずっと泣いていたんだ。でも、あるとき突然、何事もなかったかのように泣かなくなった。どうしたのって聞いたら、『何のこと？』って言うようになってな。はじめはふざけているのかと思った。それで俺が怒ったら泣き出して、さすがに変だと思って、記憶が抜け落ちているのかなって」

このことを聞いた今でもそんなことがあったとは思えない。でも、

「……たい」

「どうした？ 里香」

「会いたい、私、水谷さんに会いたい！」

「水谷さんが忘れていたらどうする？」

「じゃあ、先にメッセージを渡そう」

そして私はお父さんと一緒に、赤い袋に新聞と手紙を入れて送ることに決めた。手紙には、「会いたいです。来月の第三土曜日にうかがつてもいいですか？ 返事をください。谷崎里香」と書いておいた。すると、病院

からすぐに手紙が届いた。

「あの里香ちゃんですか！　もちろんです。会いましょう。もう何歳になるのかな？　あのときは本当にごめんなさい。僕のじいちゃんが死んでしまつて、ようやく立ち直れたと思つて里香ちゃんに会いに行くと家がなくなつて、引越してしまつたんだなつて。来月の第三土曜日、楽しみに待つてます」

手紙にはそう書いてあつた。私はもう一度手紙を送つてみた。

「そつたつたんですか！　わたしはあのときのことをうつすらとしか思い出せません。私はどんな感じの子でもでしたか？」

すると、少ししてから手紙が届いた。

「僕のことまで忘れてしまつたのですか……里香ちゃんは大丈夫ですか？　でも、ずっと明るい子でしたよ。

私の希望でした。ありがとうございました」

うれしかった。覚えていてくれてたんだ。

それから、私たちは何度か手紙のやり取りをした。そして、ついに待ちに待つたその日が来た。

その女の子は、家の玄関を開け、木下病院へ向かつた。

「お見舞いに来ました。一一七号室に行きたいんですけど」

病院の受付にいる女性に言う。

「一一七号室の……水谷直人さんの部屋ですね。面会時間は午後八時までです」

「わかりました」

女の子はそう言うと言って一一七号室へ向かった。がんばろうKOBÉと書かれたユニフォームを持って。



北区の被害			
死者	一三人	負傷者	八一七人
全壊	二七一棟	半壊	三一四〇棟

震災そして復興、9つの人と人との物語・中央区

五円玉

田中健三

昼休みの時間。淳は友達と昼食を乐しげに食べていた。

「あと三限も授業あるやん。マジめんどいなあ、特に七限の道德とかさ」

「道德は強制的に一回は発表させられるからな。真面目なやつとかがずっと発表したらいいのにな」

「まじそれな。しかもその後、部活もあるしな。まあ俺は、シュート練習やつたらいんやけど」

「最近基礎練ばつからあんま楽しくないよな」

この人たちはクラスの中でも先生にネタでよくあてられてウケをとる感じの、地味に意義深い人たちだ。今日は一週間に一回ある七限までの日。月曜ということもあり、六限や七限は授業への反応が薄い。表情から明るさが消えている人と転寝している人が半々だ。

「もうちよつとで高校入試期間にも入るやん。四連休とか神つてる」

淳は大好きなKpopのグループの曲を聞いたり、いっぱいグッズやアルバムを買ったりするつもりだ。そのためにお年玉や小遣いをかき集めていた。入試は二月二十六日にあるのだが、前日は準備で休み、月曜日でも合格者の手続きなどがあつて、休みになる。さらに入試の週の水曜日は天皇誕生日だ。監督も入試期間中は休んでいいと言っていたので思いつき遊ぶつもりでいる。

「みんなは四連休するん？」

「全然決めてなかったわ。みんな遊べるなら遊ぼうぜ」

友達達が朗らかな顔をして言った。淳は初日以外ならいいな、と思っていた。初日はたまっている推しの動画や曲を聞いたり、グッズを買ったりする予定だ。父もそのときがちょうど休みで、新しいアルバムの予約開始日でもある。大人気グループなので一日でも遅れるともう完売しているだろう。

「初日は俺嫌だな。ゆつくり寝たいしな。月曜とかいいんじゃない？ あんま混んでなさそうやん」

淳はほつとした。翔が初日という単語を発したときは魂が抜けたような気がしたが、嫌という言葉聞いて心底ほつとした。

「月曜みんな空いてる？」

「おう」

満場一致に、淳は胸をなでおろした。

「じゃあ、そろそろ教室戻ろうぜ。今何分？」

「二十五分だ。やばいな、早めに戻らないと」

みんなが走り出す背中を追いかけてしまったとき、ふと落ちていた小銭が目にとまった。五円玉だった。五円玉は自動販売機にも使えないので、学校生活ではほぼ使わない。でもなぜか持つておくことにした。みんなはもう見えない。全速力で教室へと向かった。

七限が始まり、淳は窓の外から見える車の往来を見ていた。淳のもとへ睡魔が徐々に襲ってくる。道德の当たり方は日付の出席番号の人から後ろにいき、右の列にいつて前へいくという感じだ。重要な部分を発表していない人は強制的に発表しなければいけない。実質全員当たることになっているのだ。

「今日は阪神淡路大震災について、授業を進めていきます」

淳の住む中央区は阪神淡路大震災での被害が甚大だった。淳の両親も経験したことがあり、お母さんの妹はこの地震で亡くなつたらしい。

「では、阪神淡路大震災はいつ起きたか。今日は二十一日だから二十一番。さー、誰かなー。」

「あ、はい。僕です」

淳は窓の外を見ていて質問の内容を聞いていなかったで、崖っぷちに立たされた気分だったが、隣の女子が小声で教えてくれた。

「えーつと、一九九五年の一月十七日午前五時四十六分です」

「おおー、何時何分かも言うてくれたな。座つていいぞー」

淳は何か煽られた気がして癪に障ったが、無事発表が終わり、もう当たらないと思うと、自然とガッツポーズが出た。

下校中、淳たちは電車内で他愛もない会話をしていた。

「みんな、どんな質問答えたん？」

「淳はいいよなー。最初に当てられてー。こっちなんか話を聞いてどう思ったかを聞かれたんやけど」

「俺は翔よりはましやねんけど、どのような備えをしたいかつてことを聞かれたわ」

「僕さ、当てられた後からの記憶ないねん」

と、二人を馬鹿にするように笑つて言った。大きな声で騒いでいるので、電車内で立っている人は迷惑そうにしている。蓮が降りて翔と二人きりになった。

「翔つて好きな女子おるん？」

「何やねん、急に」

翔が顔を真っ赤にして言った。「まもなく三ノ宮々、三ノ宮。お出口は左側です。乗り換えのご案内をいたします……」淳の最寄り駅の到着放送が流れた。翔も淳がもうちよつとで降りるので顔をほころばせた。

「教えてくれてもいいんだぜ。じゃあね」

「おう。ばいばい」

「ただいま」

家へ帰り、自分の部屋にカバンを置き、制服から私服に着替える。これは帰つてからの淳のいつものルーティンだ。淳は久しぶりに漫画を読もうと思い、倉庫へと向かった。

「埃だらけだなあ」

倉庫の重厚なドアを開けると、埃に包まれた本たちが並べられていた。淳は埃を吸うとくしゃみや鼻水がよく出るため、マスクを二重にして進みだした。

「さあー、探すかー」

歩いているといろいろな種類の本が並んでいた。父が好きな登山用の本や、山の地図、母が挑戦しようとしてやめていたピラティスの本などがある。淳は昔のことを思い出した。すると、そこに幼稚園の卒園記念として配られたアルバムが置いてあった。気づいた頃にはアルバムのページを二ページほど読み切っていた。漫画は奥の方においてある。三十分ほど探したが、積みあがっている本の量は半端ではなく、諦めることにした。

「さて、見つけた日記でも読むとするか」

実は、倉庫に眠っていた本を見ていると、大分奥の方に『涼香と一香の日記！』と書いてあるB6サイズのノートを見つけていたのだ。淳はお母さんにバレないように自分の部屋へと持ち込んだ。視界に入るのは、淳と二

階の天井と同じくらいの高さの新芽が付き始めた木と日記だけだ。淳は軽い気持ちで表紙のページをめくた。

一月一日。

「涼香」 涼香と一香で日記を始めることにしました！ 今日起きたこととか人には言えないことを書いてみようと思う！ まずは涼香の番！ 今日元日！ おじいちゃんの家に行つて、餅を食べたり、お年玉をもらつたりしたよ！ 何に使おうかな……、初詣に行つて、おみくじを引いたら大吉だったよ！ 今年もいい年になりますように！ 次は一香の番。一香よろしくね！

「一香」 一香です！ 何を書いたらいいかわからない……。冬休みの宿題はまだ一つもしてないよー（笑） そろそろ始めるつもり！ あ、そう！ 明日から一日交代で書いていくよ、まずは涼香から！ 絵しりとりでもしよう！ ではまた明日。

淳はくすくす笑っていた。エクスクラメーションマークがたくさん使われている。自分の小学校や中学校の日記をエクスクラメーションマークで埋めていたことを思い出したようだ。ノートの上の日付の欄を見ると、『1995.1.1』と書いてある。笑いは消えた。この日記が始まったのは震災が起きた年だ。淳はページをめくるたびに心疾しいものが体にまとわりついた。一日ずつ、慎重に日記を読んでいく。

一月十六日。

「涼香」 何を書こうかなー。今日は月曜日だから寝坊した……ギリギリ間に合ったけどね！ 月曜日はやっぱり嫌だね。最近思うのは、スキーに行きたい！ スケートでもいいけどね！ そうそう！ みんなが最近、半年前くらいに流行った曲をずっと口ずさんでる……私は歌にあんまり興味ないからな……わからない（泣） 確か、「自分自身さん」みたいな歌詞が入ってたはず……では絵しりと！ 最近、一香の絵が上達しすぎて私との差を見せつけられてる（笑） では……！

「一香」 お姉ちゃんが聴いてたやつてなんたらワールドみたいなだよね！ 私もうろ覚え（笑） 月曜日ってしんどいよね……今週はお姉ちゃんとお出かけできる！ 楽しみ！ 明日は珍しくお姉ちゃんと一緒に学校に行こうかな！ そんなに絵は上手くないよー、じゃあ眠たいから寝るね！
おやすみ！

これが二人で書く日記の最後なのか、と気鬱になりそうだった。一旦深呼吸をして、心のざわめきを止めた。次のページを開いていいものかと頭を抱えた。目を瞑り、次のページをめくり、恐る恐る目を開ける。そこには驚くべき光景が広がっていた。赤ペンや青ペン、シャープペンシルでぐちゃぐちゃになった見開き。一月十六日のページを見ても、何かクシャツとしていたので不安だった。パリパリしてるな、と思ったら、涙がしみついて乾

燥していたのだ。この一ページにはただ、力強い字で一文が書いてあった。

一番、もどつてきて

淳は落ち着こうと思つても、落ち着けない。母はいつも落ち着いて行動する人だ。その母が日記をぐしゃぐしゃにするほどのショックだったのだらう。

淳は大きな地震を経験したことがない。そのため、東日本大震災や阪神淡路大震災の映像を見ると、余計に怖くなつてしまふ。青ざめた顔がようやく収まつたとき、自然と考えたのは母の気持ちだ。ゆつくりと寝ていたときに急に大きな地震が襲う、その恐怖。当時は緊急地震速報などもなかった。黎明のときに予告もなしに地震に襲われるのだ。揺れている間は頭がバニクになり、固まつてしまふだらう。その後はどうだ。母がこんなにも苦しんでいたことを淳は知らなかった。別にそんなに被害はなかっただらう、自分たちにはそんなに関係ないなどと軽い気持ちでいた淳がダメだった。

一旦、日記を閉じた。そして、一階へと降りて、トイレに行つた。その間、ちらつと母が見えた。母はいつも通り、食器洗いをしているが、そのときの母は淳には別人のように見えた。

「淳。淳の言つたボールペン買つてきたわよー」

淳はビクツとした。ボールペンと言われたらさつきのことを思い出してしまふ。別に母は何もしていない。だ

が、先ほどの衝撃で感覚がまだ麻痺しているようだ。

「あ、ありがとう」

スケーターでもあるかのように、地面から足を離さずに、そーとボールペンをとった。

「どうかしたの？」

「ううん。ボールペンありがと」

ちよつと怪しまれたようだが、その原因かは知られていないだろう。淳はボールペンを部屋に置き、深呼吸した。

淳は思い立つて、近くにある東遊園地へと向かつてみた。今までは1・17のつどいなどにもまったく興味はなく、母が毎年参加しているのを知っている、自分が行ってみることはなかった。その東遊園地に今立っている。まず「1・17希望の灯り」に行ってみた。母の日記を見たただけなので、それほど実感はわかない。中央区の一部は震度七もあつたという。こんなに被害は出たはずなのに何も感情が出てこない。

自然の気持ちいい空気を吸ったが、心の中にはまだもやもやが残っている。家へ戻り、再び日記を開く。

一月十八日。

地震から一日が経ちました。私の心はボロボロです。日記を書けるような状態ではありません。でも何

か書かないと気が狂いそうで……。そうだ、一人の同級生には感謝しています。私は地震発生後はパニックで動けず、屋根に埋もれました。三十分くらいそこに私はいました。だんだん苦しくなつてどう行動しようかも考えられなくなりました。そんな私を同級生の子が助けてくれました。その後、一番を探しました。でも、見つかったのは地震発生から三時間後でした。もうそのときにはもう息絶えていて……

そのあとは泣いてしまったのだろう。水玉模様の乾いた紙が浮き上がっていた。その後、続きを読んでいくと、一番の遺体の近くに貯金箱が壊れずに残っていたとある。その貯金箱には小さな紙と五円玉が一枚入っていた。その紙には、「いろいろな人と縁がありますように！」と書いていた。

そのあとから、少しずつ日記に書くことが増えていつている。地域の暗い空気を改善するために、できることは率先してしたこと、そうすることでしか元氣になれそうにないこと、一番力強い字で書いていたのは、数週間後にあつた「一番の分まで背負つて私が堂々と生きる」という言葉だ。淳はこう感じた。「母は胸を張つて生きているな」と。淳は母にこの日記を返そうと思つた。母と一番さんの重要な日記であるからだ。母はいつも通り新聞を読みながらコーヒーを飲んでいる。緊張してなかなか口が開かない淳だったが、十分ほど経つた頃だろうか、ようやく口にすることができた。

「お母さん、俺、お母さんと一番さんの震災の年の日記読んでん。俺、お母さんみたいに大きな地震は経験していない。今年の集いるときだつて普通に寝てたし。でも、なんだかまだ実感がわかないねん。この故郷の神

戸、中央区は被害もあつたはずなのに……」

思い切つていったため、最初の一声が大きくなつてしまった。母は自然な笑みを浮かべ、

「そう。あの日記読んだのね、あの日記読んで淳がこんなにも考えてくれるとは思つてなかつた……震災のときのアルバムでも見てみる？　百聞は一見に如かずつて言うし……」

母は五分くらいしてほこりを払いながら戻つてきた。

「震災のときの神戸の様子だけでいいよね……？」

「あ、うん」

母は淳に微笑みかけて、アルバムを渡した。なんだか重たい感じがする。母の話す震災当時の状況に、そつと耳を傾ける。

その写真を青とオレンジのコントラストが美しい、黄昏の空に照らし合わせて見た。徐々に明るいオレンジの空が消えていくとともに、淳の心の明かりも消えていった。フラワーロードではビルが崩れていたり、傾いていたり、今では考えられない光景だった。他にもいつも三ノ宮駅に向かつている道にはいろいろなものが散乱していたり、家が崩れていたりと淳には衝撃的なものばかりだった。もはや言葉も見つからない。

淳は部屋に戻り、窓の外を見ながら満月を眺めていた。淳の涙に満月が映つていた。黄昏時とは違い、雲はなく、空の満月だけが淳を見ている。淳はこれまでの心の靄が少し晴れた気がした。

後日。震災について校外学習に行つた。最初は語り部さんのお話だという。いつもは手遊びなどをするほど話を聞かない淳もあのアルバムを見たり、母の話を聞いたりしたこと、で、気になつてた。

「私ねえ、中学校三年生のときに被災したんですよ。寝てたら急に地震が襲つてきて。でね、そのときは、ライフラインが遮断されてしまつて。水なども蛇口から出ませんでした。でも、水は生きるために一番重要ですからね。それで、よく登校しているときに会うお婆さんの家に何かがあつたんですよ。それがあつたから今、私は生きてるんです。この問題は誰か当ててみようかな」

みんなが一斉に目線を下にしたり、書いているふりをしたりしている。みんな言つてみれば、通常運転だ。

「じゃあ、三列目のマツシュの男子。わかるかな？」

周りを見てみる。三列目のマツシュは淳だけだつた。淳は元気よく立ち上がった。

「井戸じゃないですか？」

「お、正解！ よくわかりましたね」

みんなが一斉に淳を見る。淳は意気揚々と笑顔を見せた。

「私はね、子供の頃から挨拶をよくしてたもんですから。お婆さんに水が必要だつて言つたら、快く汲ませてくれて。そのときにたくさんの人に挨拶してて本当によかつたな、と思いましたよ。皆さんも地域の人にはちゃんと挨拶しますか？」

淳は挨拶をすることと、地域の人とつながることの関係など考えたこともなかった。始めなければならぬ

ことは自分のすぐ近くにあった。

「地震が起きてすぐのとき、私のことを思い出して駆けつけてくれた地域の人たちが私のことを助けてくれてねえ。すごく嬉しかったんです。でも、私の家は二階が一階になっていました。一階には祖母と祖父が暮らしていて。瓦礫の中をかきわけても、見つからなくて。両親と一緒に懸命に探し出したんですけど、結局、二人とも見つかったのは、その日の昼頃でした。そこからは私の気持ちも、街の気持ちも暗くなりました。どこからか泣き叫ぶ声、食べ物をほしがっている声が聞こえたんです」

母も大変だったんだろうな、と改めて思った。その後も語り部さんの話は続いた。この暗い状況の神戸の街を照らすために、ボランティアに参加したときの話など。

「つらいこともあったけど、たくさんの人からお礼の言葉をいただく、頑張りたいって思えましたね。そんな何でもないことがあったからこそ、ボランティアも続けられて、今この場所にも立てているのかなあと思います」その話の後はビデオや展示を見て回った。みんなが興味なさそうにするところも淳は一つも見落とさないように、真剣に回った。写真がたくさん展示されていたり、当時の道具がそのまま展示されていたりと震災について考えさせる場所だった。特にシアターで見た映像は迫力に溢れたものだった。震災の怖さを体で感じることができたようだ。

充実した校外学習も終わり、帰り際もしつかり挨拶をした。みんな吃驚仰天した顔で見ているので、少し

照れくさかった。そのあと家へ帰り、今日のことを母に話した。ちよつとした沈黙の後、母が淳に何かを手渡した。五円玉だ。あの母の日記に入っていた五円玉だ。

「ちよつと大人になった淳に、プレゼント。好きに使っていいよ」

使うつて？ ひんやりとした感触を感じながら、しばらくして淳は心を決めた。ダツシユで生田神社に行き、強く握っていた五円玉を優しく賽銭箱に投げ入れて、目を瞑った。

震災で亡くなつた人が天国で幸せに暮らしていますように。

お母さんが元気に生きられますように。

いろいろな人とご縁がありますように。

睨の裏には、震災の展示で見た、断層のずれのように壁にヒビの入っているそごうの様子が映る。目を開けた淳の頬を、涙が伝っていた。

中央区の被害

死者	二四三人
負傷者	三七八二人
全壊	六三四四棟
半壊	六六四一棟

編集後記

白陵中学校文芸部「震災連作小説」をお手に取っていただきありがとうございます。この冊子は構成から確認までを中学二年生、中学一年生のみで行った初めてのものです。テーマは「阪神淡路大震災」。二十七年、私たちがまだ生まれていなかったときの出来事を伝えるために私たちに何ができるのか、と考え、文芸部として小説を書くことになりました。神戸市の九区を舞台に、部員それぞれが短編小説を書きました。阪神淡路大震災という「事実」を小説という「虚構」の世界として描くのは簡単なことではなく、難航することも多くありましたが、「人と防災未来センター」へ行き、部員同士と意見交換する中で、それぞれのアイデア、そして何を伝えるべきなのかはつきりしていったと思います。また書くことで、命の尊さや人と人とのつながりの大切さを学びました。今では私たちにとってかけがえのないものとなっています。

すばらしい機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。（齊藤葵）

震災そして復興、9つの人と人との物語

発行日 令和四年三月三十一日

発行者 学校法人三木学園 白陵中学校文芸部

所在地 〒六七六―〇八二七

高砂市阿弥陀町阿弥陀二二六〇

TEL 〇七九―四四七―一六七五

FAX 〇七九―四四七―一六七七

震災そして復興、9つの人と人との物語